

名古屋城調査研究報告4

埋蔵文化財調査報告書3

特別史跡名古屋城跡未告示地区(二之丸) 発掘調査報告書

第3次・第4次

2023

名 古 屋 市



調査区11 全景（北から撮影）



調査区15 全景 (南から撮影)



調査区13 全景 (北から撮影)



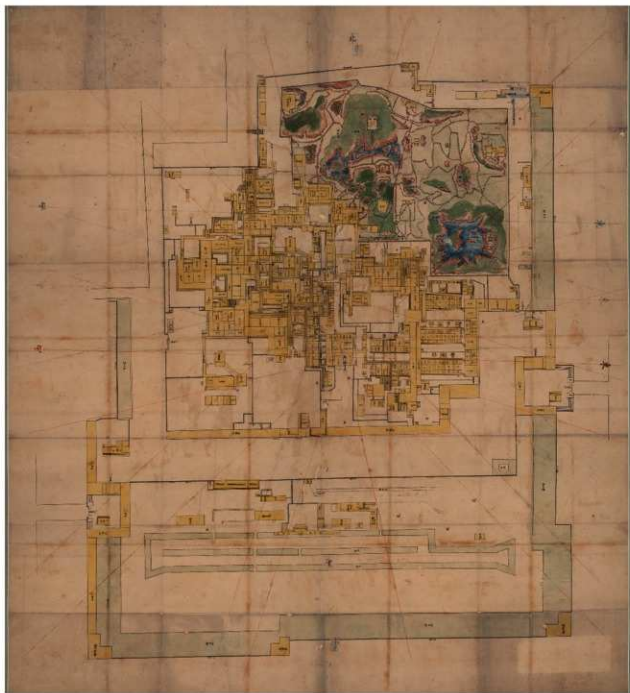
調査区14 出土 施釉瓦



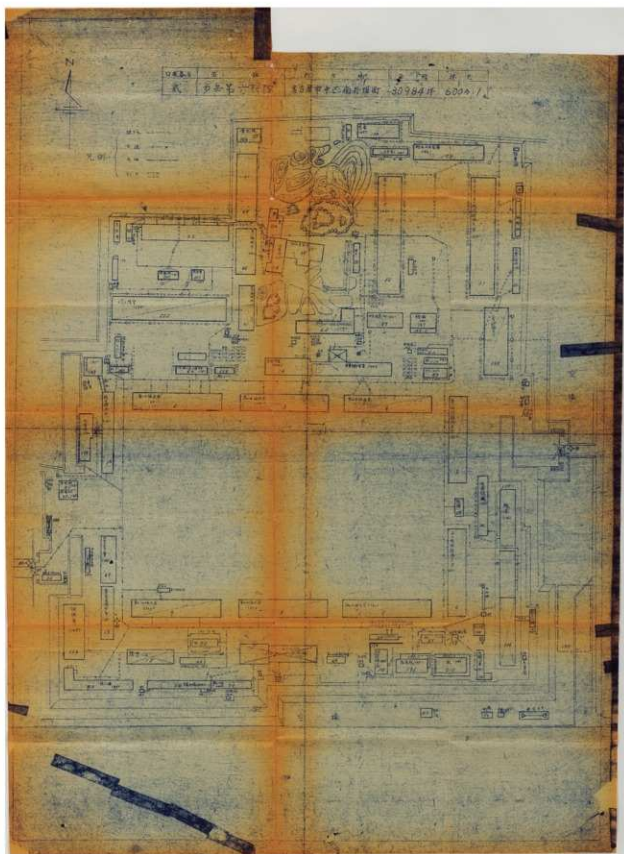
調査区11 SK2 (北東から撮影)



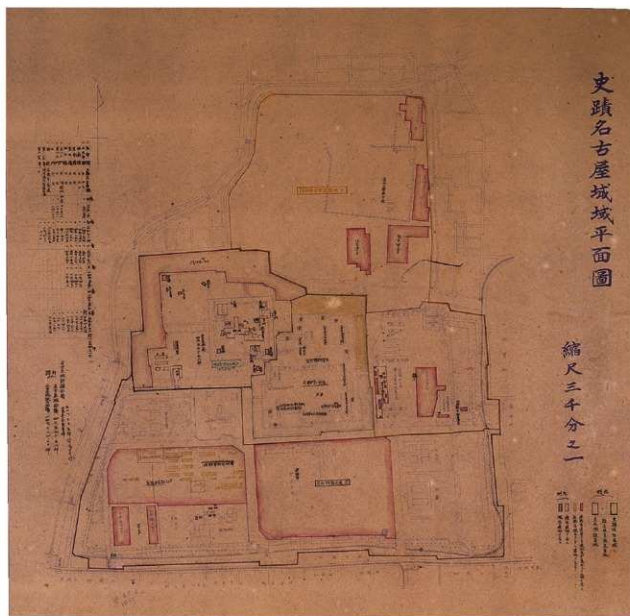
調査区11 SK1・コンクリート基礎A (北から撮影)



御城二之丸圖 (名古屋城総合事務所蔵)



名古屋城二之丸平面図 歩兵第六聯隊 (博物館 明治村所蔵)



史蹟名古屋城城平面圖 (名古屋城総合事務所蔵)



「二之丸地区」発掘調査地点

- ①【試掘】平成16年度(2004)
- ②【試掘】平成20年度(2008)
- ③『名古屋城二之丸地区発掘調査報告書第1次・第2次調査』
- ④平成30年度～令和元年度(2018～2019)
- ⑤※本報告書
- ⑥令和2年度～令和3年度(2020～2021)

二之丸庭園発掘調査地点

- ⑦『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書第1次～第3次』
- ⑧平成26年度(2013)(第1次)
- ⑨平成26年度(2014)(第2次)
- ⑩平成27年度(2015)(第3次)
- ⑪『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書第4次～第6次』
- ⑫平成28年度(2016)(第4次)
- ⑬平成29年度(2017)(第5次)
- ⑭平成30年度(2018)(第6次)
- ⑮令和元年度(2019)(第7次)
- ⑯令和2年度(2020)(第8次)
- ⑰令和3年度(2021)(第9次)
- ⑱昭和49年度(1974)
- ⑲昭和51年度(1976)
- ⑳昭和52年度(1977)

名古屋城二之丸発掘調査位置

例 言

1 本書は名古屋市中区二の丸に所在する特別史跡名古屋城跡（未告示地区）で実施した発掘調査の報告書である。

2 調査は「特別史跡名古屋城跡保存活用計画」(2018)に基づき、特別史跡未告示地区解消及びの特別史跡未告示地区保存活用に関する基本構想を策定するため、名古屋市観光文化交流局名古屋城総合事務所名古屋城調査研究センター（以下、「名古屋城調査研究センター」という。）が実施した。

3 調査の体制は次の通りである。

発掘調査担当	立会調査（2004）	教育委員会文化財文化財保護室	水野裕之
	試掘調査（2008）	同	伊藤正人
	第3次調査（2020）	名古屋城調査研究センター調査研究係	佐藤公保、市澤敦子
	第4次調査（2021）	同	高橋圭也、大村陸、 佐藤公保
資料調査担当（2020～2022）	同		木村慎平、高橋圭也

発掘調査に伴う排土工事は有限会社庭匠が請負い、測量は株式会社イビソクに委託した。

4 調査期間	2004年度立会調査	2004年11月20日、11月22日
	2008年度試掘調査	2008年5月26日～6月2日
	第3次発掘調査（調査区13、14）	2021年3月8日～3月31日
	第4次発掘調査（調査区11、12、15）	2022年1月11日～2月28日
	資料調査	2020年～2022年

5 3次調査の遺構写真は佐藤が、4次調査の遺構写真は高橋が撮影した。3次調査及び4次調査出土の遺物写真は高橋が撮影した。

3次調査出土遺物の実測、トレースは国際文化財株式会社に委託した。4次調査出土遺物の実測、トレースは高橋圭也、大村陸、森朋子、米倉由佳が行った。4次調査出土石造物の実測及び3次元モデル作成は株式会社C-ファクトリーに委託した。

その他整理作業には下記の参加があった。

真中裕美子、三輪恵子、山本貴子

科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。

- 6 本書の執筆は第5章を株式会社パレオ・ラボの森将志、石川智、バンダリスダルシヤンが行い、それ以外を高橋が行った。ただし第2章第2節Ⅰ.2004年度立会調査と同Ⅱ.2008年度試掘調査は、名古屋市教育委員会文化財保護室が作成した文化財立会調査記録及び文化財試掘調査記録をもとに高橋が執筆した。図面は再トレースして使用した。注記は表現を統一するために一部改変したが、当時の担当者の意図を変更しないように細心の注意を払った。また、第3章第1節3.遺構調査区13及び同調査区14は佐藤の調査記録をもとに高橋が執筆した。

編集は名古屋城調査研究センターで検討した上で高橋が行った。

- 7 本調査における出土遺物、写真、実測図は名古屋城調査研究センターが保管する。立会調査（2004）及び試掘調査（2008）の写真、実測図は教育委員会文化財保護室が保管する。
- 8 本調査において次の機関並びに個人から御協力、御教示を得た。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略、名称については2023年現在のもの）

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議	座長	瀬口哲夫（名古屋市立大学名誉教授）
	副座長	丸山宏（名城大学名誉教授）
	構成員	赤羽一郎（前名古屋市文化財調査委員会委員長）
	構成員	小濱芳朗（名古屋市立大学名誉教授）
	構成員	高瀬要一（公益財団法人琴ノ浦温山荘代表理事）
	構成員	籠和善（名古屋工業大学名誉教授）
	構成員	三浦正幸（広島大学名誉教授）
	構成員	藤井譲治（京都大学名誉教授）

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議石垣・埋蔵文化財部会

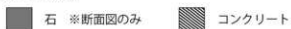
	座長	北垣聰一郎（石川県金沢城調査研究所名誉所長）
	副座長	赤羽一郎（前名古屋市文化財調査委員会委員長）
	構成員	千田嘉博（奈良大学教授）
	構成員	宮武正登（佐賀大学教授）
	構成員	西形達明（関西大学名誉教授）
	構成員	梶原義実（名古屋大学大学院教授）

博物館明治村、株式会社橋本電機工業、東海国立大学機構大学文書資料室、愛知県体育館、名古屋市教育委員会文化財保護室、水野信太郎、田口一男

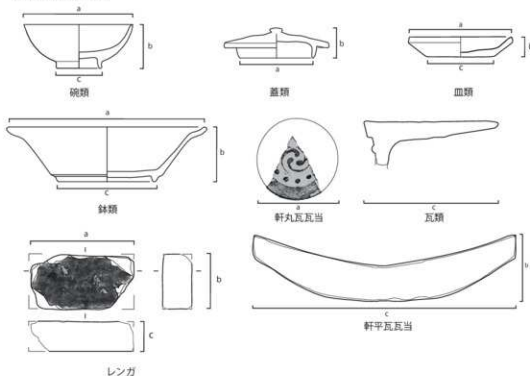
凡 例

- 1 「二之丸地区」とは特別史跡名古屋城跡未告示地区のうち名勝区域を除いた場所を指す事業名である。本書において二之丸地区を便宜的に「二之丸南部」と「二之丸北西部」にわけた。位置は巻頭8に示した。
- 2 本書の水平基準は標高を表し、東京湾平均海面（T.P.）を使用した。
- 3 方位は座標北であり、座標は世界測地系第7系を使用した。
- 4 本書における土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』2007年版による。
- 5 遺構略記号は『発掘調査のてびき』（文化庁）による。
- 6 遺物の分類は以下の通り。
種別は土器、須恵器、山茶碗、陶器、磁器、炆器、瓦類、土類、金属製品、ガラス製品、石油製品、自然遺物に分類した。土類はレンガ、タタキ、モルタル、コンクリートを含む。土器、須恵器、山茶碗、陶器、磁器、炆器は形状から碗類、蓋類、皿類、鉢類に分類した。瓦類は軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、軒棧瓦、棧瓦に分類し、それ以外を道具瓦とした。個別の名称が明らかな道具瓦はその名称を記載した。遺物の計測部位は下の図の通り。
- 7 遺構・遺物実測図の縮尺は各図中に示した。
- 8 本書での写真図版の縮尺は任意である。

遺構平面図凡例



抽出遺物計測箇所



目 次

第1章 遺跡をとりまく環境	
第1節 名古屋城の地理的環境	1
第2節 名古屋城二之丸の歴史的環境	2
第2章 調査の経緯と既往の調査	
第1節 調査の経緯	4
第2節 既往の調査	4
1. 2004年度（平成16）立会調査	10
2. 2008年度（平成20）試掘調査	10
3. 第1次（2018年度）・第2次（2019年度）調査	16
第3章 調査成果	
第1節 調査の概要	18
1. 調査区設定の目的	18
2. 基本層序	18
第2節 遺構	19
調査区11	19
調査区12	23
調査区13	25
調査区14	27
調査区15	29
第3節 遺物	32
遺物の概要	32
調査区11	33
調査区12	34
調査区13	35
調査区14	36
調査区15	37
第4章 資料調査成果	46
第5章 自然科学分析	53
第6章 総括	60

表 目 次

表1 名古屋城二之丸年表	3	表7 SK2の産出花粉孢子一覧表	53
表2 名古屋城発掘調査一覧	6	表8 SK2の試料1g当りのプラント・オパール個数	54
表3 二之丸地区第1次・第2次調査 一覧	16	表9 SK2の堆積物中の珪藻化石産出表	54
表4 陶磁器観察表	43	表10 環境指標種群と本分析で産出した種	54
表5 瓦類観察表	44	表11 SK2から出土した大型植物遺体	55
表6 「名古屋城二之丸平面図歩兵第六聯隊」 長さの比較	47	(括弧内は破片数)	55

図 版 目 次

図1 調査地と周辺の地形	1	図17 出土遺物1~12	39
図2 名古屋城内発掘調査地点	5	図18 出土遺物13~16	40
図3 2004年度、2008年度調査位置図	10	図19 出土遺物17~32	41
図4 A1調査区 平面・断面図	12	図20 出土遺物33~43	42
図5 A2調査区 平面・断面図	12	図21 「名古屋城二之丸平面図 歩兵第六聯隊」デジタルトレース	50
図6 A3調査区 平面・断面図	13	図22 「歩兵第六聯隊配置図」	51
図7 A4調査区 平面・断面図	14	図23 アメリカ軍撮影航空写真	51
図8 A5調査区 平面・断面図	15	図24 「史蹟名古屋城城平面図」	52
図9 二之丸地区第1次~第4次調査 発掘調査地点	17	図25 1955年都市計画基本図	52
図10 調査区11 平面図	21	図26 植物珪酸体分布図	54
図11 調査区11 断面図	22	図27 SK2から産出した花粉・孢子化石	57
図12 調査区12 平面・断面図	24	図28 SK2から産出した植物珪酸体	58
図13 調査区13 平面・断面図	26	図29 SK2から産出した珪藻殻	58
図14 調査区14 平面・断面図	28	図30 SK2から出土した大型植物遺体	59
図15 調査区15 平面・断面図	31		
図16 調査区15 SD7 立面・断面図	32		

写 真 目 次

写真1 調査区11 SK2 (南から撮影)	20
写真2 調査区11 SK1 (北から撮影)	20

第1章 遺跡をとりまく環境

第1節 名古屋城の地理的環境

名古屋市の中心部は、5年以上前に堆積した熱田層と呼ばれる海成の砂・シルト・粘土の互層で構成された洪積層から成っている。標高は5～15mである。熱田層の堆積後、海面が低くなった時期に河川の浸食によって割り残された部分が台地化し、熱田台地となった。熱田台地は、名古屋城付近が北端で熱田神宮付近が南端となる。南北15km、東西は広いところで3kmほどの細長い形状をしている。名古屋城は熱田台地の北西端に位置しているため、西側と北側は崖、南側と東側は比較的平坦な台地になっている。

名古屋城は本丸・二之丸・西之丸・御深井丸を中心に広がり、各曲輪の標高は12～15mである。東側と南側には空堀を挟んで主に武家地として利用された三之丸がある。北側には新御殿や下御深井御庭がある。台地の西側に沿って堀川が南北に通じている。堀川は名古屋城築城に伴って開削されたと考えられており、名古屋城下町における水運を担っていた。

名古屋城の縄張は、直線状の曲輪で構成され、各曲輪を土橋でつなぐとともに、樹形や馬出を用いて強固な防御がなされている。三之丸は空堀、二之丸・西之丸・御深井丸は北と西を水堀で東と南は空堀、本丸は四方を空堀で囲まれている。

二之丸は本丸の東側にある。二之丸の西は本丸大手馬出を通じて本丸、西之丸と接続している。北は本丸搦手馬出を通じて本丸、御深井丸と接続している。二之丸庭園は二之丸北部に位置しており、名勝に指定されている。二之丸北西部及び南部は二之丸御殿や馬場が存在した。



図1 調査地と周辺の地形

第2節 名古屋城二之丸の歴史的環境

名古屋城は濃尾平野を望む熱田台地の北西端に、徳川家康によって慶長15（1610）年に築城が開始された。この内二之丸は、天守のある本丸の内堀を挟んで東側に造営された。二之丸周辺には、かつて今川氏や織田氏が拠点とした那古野城が存在したとされるが、この頃までには廃城となっていた。

築城当初、二之丸の北部には平岩親吉の屋敷があったとされる。慶長16年（1611）に親吉が没すると、二之丸北部には二之丸御殿が築造され、元和3年（1617）には作事が完了したとされる。初代尾張藩主の徳川義直は、元和2年（1616）の入部以来、本丸御殿を日常的な居所としていたが、同6年（1620）に二之丸御殿に移った。以後、同所が藩主代々の在国中の居所となり、尾張藩の施政の場となった。この御殿には、中御座の間をささむ北・南の一角に庭園が造営された。この内、特に北御庭は、東西に広がる池が中央に位置し、御祠堂・金声玉振閣等の建物が構えられるなど、儒教的な色合いが濃い唐風の庭園で、寛永年間（1624～44）には完成したとされる。

義直によって作られた唐風の庭は、文化・文政年間（1804～1830）、10代藩主・斉朝の代に大きく改造され、回遊式庭園に姿を変えた。まず庭園の規模が東側の丑寅御構方向に拡張された。斉朝によって庭園が改造されていく過程で、特に文化10年（1813）から同14年（1817）頃までの間に、「新御席」・「風信」・「玉童亭」（後の「余芳」の場所とされる）・「多春園」・「植木屋」などと呼称される多くの茶亭・植栽空間が造られた。また、桜・梅・松・椿などの樹木や色彩豊かな花、池・築山などが造営されたことが古絵図等からうかがえる。文政元年（1818）から同3年（1820）頃までの間には、二之丸御殿の長局を移転し、跡地に庭園が拡張された。南池（東御泉水）もこの時期に整備された可能性がある。その後、天保11年（1840）から同13年（1842）の間に、二之丸御殿の改修が行われ、長局が改めて移転された。このほか、文政4年（1821）までには茶亭「霜傑」が、文政6年（1823）から同10年の間には、茶亭「余芳」が建設されたと考えられる。

一方、二之丸の南部は、築城当初は付家老の成瀬・竹腰両家の屋敷が所在した。その後、寛文3年（1663）に両家が三之丸に屋敷地を拝領すると、この地は江戸時代を通じて「向屋敷」と呼ばれる馬場、矢場等になり、藩士の鍛錬の場となった。

明治になると、二之丸は陸軍省所管となり、二之丸にあった建造物は破却されていった。明治6年（1873）には二之丸御殿が取り壊され、その跡地に兵舎が建設された。また、これに先立つ同4年（1871）には、庭園内の茶亭「余芳」・「風信」が民間に売却された。これ以降、軍関連施設の建設は続き、終戦時には二之丸に50棟を超える建物が存在していたとされる。このようにして江戸時代の施設・構造物は姿を消し、二之丸内の様相は大きく変貌した。但し、二之丸庭園の北西に位置する北庭、栄螺山等については一部に手が加わったものの、形態等は江戸時代の元の姿を留めたと考えられ、北庭の南にあった将校集会所の裏庭として利用された。また明治12～13年（1879～80）頃には、吉田昭和の指揮のもと、将校集会所周辺の庭が整備され、北庭の池底も修理された。

終戦を迎え、多くの陸軍の施設は除去され、一部が名古屋大学等の校舎や学生寮として利用された。昭和40年代末から50年代にかけての公園整備に伴う造成が始まると、こうした建物は除却され、昭和の発掘調査の成果を基に二之丸は現在見られる姿となった。

表1 名古屋城二之丸年表

編年表	時代区分	城主・管理者	実 績	
編年表	天正8年以降 1580以降	-	現在の二之丸周辺にあったとされる郡古野城が廃城となる	
江戸期	慶長15年	1610	徳川家康による名古屋城築城の開始（『当代記』） 名古屋城天守完成 （正月27日 築城、二之丸の平野郡古野城に設置） 本丸御膳所御開始（『当代記』） （10月 大坂冬の陣） 旧東照宮完成（御膳所の趣か） 本丸御殿完成 （4月9日 築御所名古屋城に到着） （4月12日 築造・御膳所備） （5月 大坂夏の陣/ 築造出陣） 徳川家康、名古屋城に逗留 （4月17日 築御所迄） 豊利が尾張に正式に入城、駿府城から名古屋城に移居（『牧公實録』） 二之丸御殿完成（『牧公實録』『藤原録』『金城遺古蹟』） この頃、豊利が二之丸御殿に移る（以後、歴代城主が居住）（『牧公實録』『金城遺古蹟』） 『中御所之間名取御』造営開始か この頃『中御所之間名取御』完成か 『藤原録』『二之丸内事この頃すべて終了』、『中御所之間名取御終結』 二之丸御殿に御所寄、御旗に御守を建立（『牧公實録』） 四道堂御所の改修（講り廻下の撤去等）（『尾州御留守日記』） 豊山山に惣野社と愛宕社を勧進（『金城遺古蹟』『尾州御留守日記』） 聖堂を除却し法堂をへ下願（『金城遺古蹟』） 『新御所御始結』 御所寄所の丹波御機方向に御旗を拡張し、新御所、法堂、主御所、参拜庭、榎木屋を設ける（『尾州御留守日記』『金城遺古蹟』） 二之丸御殿の長巻を移転し、御所に御旗を拡張（『尾州御留守日記』）。 御堂（東御所）もこの時期に整備されたか。 馬場を下御所御旗の「桜花壇之内」に移転（『金城遺古蹟』） 10月に豊後で戦犯御旗の記録がある（『尾州御留守日記』）。 この頃までに御旗はひと通りの整備が完了したか。 旧東照宮御旗（御旗台を移転し石の置に）（『金城遺古蹟』） 聖堂を除却し法堂3年建立か（『金城遺古蹟』） 参道を設ける 新御所庭に下御所御旗を新御旗を造営 二之丸御殿改修（長巻を移転）（『金城遺古蹟』） 二之丸御殿の外縁部に馬場を再建（『金城遺古蹟』『金城実況』）	
	慶長17年	1612		
	慶長19年	1614		
	慶長20年	1615		
	元和元年			
	元和2年	1616		
	元和3年	1617		
	元和6年	1620		
	寛永5年	1628		
	慶安4年 （享保）	1651		二代城主 光友
	寛文4年	1664		
	享保9年	1724		六代城主 継友
	寛政12年	1800		十代城主 高朝
	文化10～14年頃	1813～1817頃		
	文政3年～3年頃	1818～1820頃		
	文政3年	1820		
文政4年	1821			
文政5年	1822			
文政6年頃	1823頃			
文政6～10年	1823～1827			
文政10年	1827			
天保11～13年	1836～1838	十二代城主 尚在		
天保14年	1843			
明治4年	1871	十六代 豊吉		
明治6年	1873	陸軍省所管		
明治12～13年頃	1879～1880頃			
明治24年	1891			
昭和20年	1945	大蔵省所管		
昭和23年	1948			
昭和24年	1949			
昭和28年	1953			
昭和34年	1959			
昭和38年	1963			
昭和39年	1964			
昭和40年	1965	名古屋市		
昭和41年	1966	名勝指定勧誘 ：文部省所管		
昭和42年	1967			
昭和43年	1968	文部科学省所管		
昭和44年	1969	名勝指定範囲外		
昭和48年	1973	：大蔵省所管		
昭和49年	1974			
昭和52年	1977	：財務省所管		
平成30年	2018			

第2章 調査の経緯と既往の調査

第1節 調査の経緯

名古屋城は1932年（昭和7）及び1935年（昭和10）に国の史蹟に指定されたが、二之丸と三之丸は陸軍の用地であったため指定されなかった。1952年（昭和27）に史蹟から特別史蹟に指定変更された際も史蹟の範囲が引き継がれている。

しかし二之丸は現存する庭園が1953年（昭和28）に「名古屋城二之丸庭園」として名勝に指定され、2018年（平成30）に庭園の東側が名勝に追加指定された。

その後、二之丸は1977年（昭和52）に文化財保護審議会から特別史蹟に追加指定すべき箇所として答申されたが、名古屋城と関係のない施設である愛知県体育館があるため、告示されなかった。特別史蹟として未告示の二之丸は名勝区域と名勝指定を受けていない区域に二分されている。事業としては名勝区域を「名勝名古屋城二之丸庭園」、名勝指定を受けていない区域を「二之丸地区」と称している。名古屋市では二之丸地区を含む告示されなかった場所を「特別史蹟名古屋城跡（未告示地区）」と称し、未告示状態の解消を目指している。

名古屋市では愛知県体育館移転後の二之丸地区保存活用に関わる基本構想を検討するための基礎調査として、2018年度から2021年度にかけて発掘調査を行った。また、発掘調査と並行して資料調査を行った。本書は2020年度（第3次調査）と2021年度（第4次調査）発掘調査及び、2021年度から2022年度にかけて行われた資料調査の報告書である。

発掘調査にあたって当該地が特別史蹟の未告示地区であるため、特別史蹟として現状変更申請を行うのではなく、愛知県と名古屋市教育委員会文化財保護室が現状を変更することに関する協議を行う形をとった。

二之丸では二之丸地区の保存活用に関わる基本構想を検討するための基礎調査の他に立会調査や庭園整備に伴う調査などが各所で行われてきた。既往の調査位置について巻頭7及び図3にまとめた。このうち小規模な調査であるため、報告の機会を逸していた2004年度及び2008年度の調査については次節で報告を行う。

第2節 既往の調査

名古屋城では特別史蹟及び名勝区域内で主に整備を目的とした発掘調査が行われている（図2・表2）。三之丸は特別史蹟に指定されていないが、三の丸遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれ発掘調査が行われている（図2・表2）。

名古屋城二之丸では公園として整備されはじめた1974年（昭和49）以降から発掘調査が始まった。名勝名古屋城二之丸庭園整備事業に伴う本格的な発掘調査は2013年（平成25）から始まり、現在も調査が行われている（巻頭7・表2）。

特別史蹟や名勝に指定されなかった二之丸北西部（位置は巻頭8を参照）は芝生広場として活用され、

1974年（昭和49）から現在まで様々な催事が行われている。特に2004年度に行われた催事は土地の掘削を伴ったため、名古屋市教育委員会によって立会が行われた。二之丸南部は愛知県体育館以後、大規模な開発や土地の形状変更を伴う催事が行われなかったため、2018年まで発掘調査は行われなかった。

2008年度に二之丸北西部整備の参考にするために試掘調査が行われた。また、北西部と南部で遺構の残存状況を確認するために2018年度から2021年度まで4次にわたって発掘調査を実施した。2018年度（第1次）調査と2019年度（第2次）発掘調査の報告は名古屋市2021「名古屋城二之丸地区試掘調査報告書」にて報告されている。

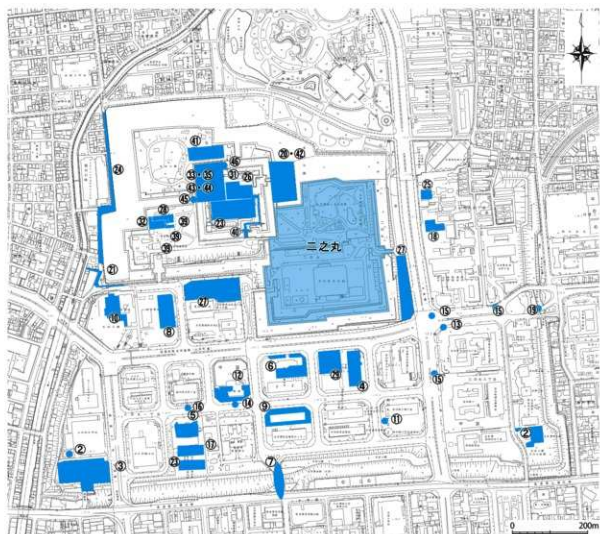


図2 名古屋城内発掘調査地点
調査の詳細は表2を、二之丸発掘調査位置の詳細は巻頭8を参照

表2 名古屋城発掘調査一覧

NO	地点名	調査年	調査主体	報告書等	主な成果
①	名古屋城二之丸庭園	1975～ 1976	名古屋市教育委員会	『名古屋城二之丸庭園発掘調査概要報告書』(1976)	北御庭の園池東端、東御庭の霜降、暗渠、南池が検出
②	名古屋市公館（1次・3次） 丸の内中学校（2次）	1987～ 1988	名古屋市教育委員会	『名古屋城三之丸遺跡—1,2,3次調査の概要』(1989)	近世の武家屋敷地の街路、区画溝、屋敷地境、門、廃棄土坑などを確認。 南土居筋、東土居筋を確認
③	愛知県図書館	1988	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅰ』(1990)	弥生中期～平安時代の堅穴住居群、墳丘墓、遺物等を確認 戦国時代の溝を確認 近世の武家屋敷に関連すると思われる溝、井戸、建物基礎、廃棄土坑、地下室などを確認 西土居筋、御園門内側の「内片端」広場を確認
④	名古屋第一地方合同庁舎	1988	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅱ』(1990)	那古野城に関連すると思われる溝・井戸・橋列・堀等の遺構を確認 近世の武家屋敷の溝、井戸、礎石建物、廃棄土坑などを確認
⑤	名古屋家庭簡易裁判所合同庁舎	1990～ 1991	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅲ』(1992)	奈良～平安時代の柱穴、土坑を確認 戦国時代の火溝などを確認 近世の武家屋敷に関連する土坑、ピット、井戸、溝などを確認
⑥	愛知県警察本部	1991	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅳ』(1993)	戦国時代の堀（溝）などの遺構を確認 江戸時代の武家屋敷の溝、井戸、橋列、土坑、屋敷地境、石列、建物跡などを確認 江戸時代の遺構群が整地層の上面から検出されたことにより、築城時に計画的な整地が行われたことが判明
⑦	本町門	1991	名古屋市教育委員会	『名古屋城本町門跡発掘調査概要報告書』(1992)	本町門の堀跡を確認
⑧	中部電力地下変電所	1992～ 1993	名古屋市教育委員会	『名古屋城三之丸遺跡第4・5次発掘調査報告書—遺構編・遺物編』(1994)	那古野城期の屋敷区画、道路など 将軍家「御堂屋」関係の遺構・遺物 陸軍病院関係の遺構・遺物
⑨	愛知県三之丸庁舎	1993～ 1994	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅴ』(1995)	古墳時代、戦国時代、江戸時代の遺構・遺物を確認 江戸時代の武家屋敷に関連すると思われる土坑、溝、井戸、建物跡、掘り込みなどを確認
⑩	名古屋市能楽堂	1993～ 1994	名古屋市教育委員会	『名古屋城三之丸遺跡第6・7次発掘調査報告書』(1995)	室町時代の土坑墓群を確認 戦国時代の那古野城関連遺構群を確認 近世の武家屋敷の井戸、土坑、溝を確認

NO	地点名	調査年	調査主体	報告書等	主な成果
⑪	無絨絨制室	1995	愛知県教育委員会	「代替無線統制室建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(1997)	江戸時代の武家屋敷の溝、横列(塀)、土坑などを確認
⑫	名城病院	1995～1996	名古屋市教育委員会	「名古屋城三の丸遺跡第8・9次発掘調査報告書」(1997)	中世、近世の遺構・遺物を確認 近世の溝状遺構、道跡、堀(橋)状遺構、井戸、土坑などを確認
⑬	地下鉄出入口	1998	名古屋市教育委員会	「名古屋城三の丸遺跡第10次発掘調査報告書」(1999)	戦国時代の那古野城に関連すると思われる溝などを確認 江戸時代の武家屋敷の土坑、柱穴、溝などの遺構を確認
⑭	下水道管築造	1999～2000	名古屋市教育委員会	「下水道工事に伴う埋蔵文化財報告書」(2000)	江戸時代初期の地割に関係すると思われる溝や土坑などを確認
⑮	NTT電話工事	2000	(株)西日本電信電話 名古屋支店	「名古屋城三の丸遺跡一平成12年度NTT電話工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(2001)	江戸時代の武家屋敷に関連すると思われる廃棄土坑、溝などを確認
⑯	ガス管理設工事	2001	(株)東邦ガス	「名古屋城三の丸遺跡一ガス管理設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(2002)	奈良・平安時代の堅穴住居を確認 近世では、断面観察により中小路の一部を確認 熱田層が確認されず、名古屋城築城に際し、三之丸一帯で大規模な造成が行われたと推察された
⑰	地方簡易裁判所庁舎	2001	愛知県埋蔵文化財センター	「名古屋城三の丸遺跡VI」(2003)	那古野城関連の遺構と思われる戦国時代の溝などを確認 近世の武家屋敷の溝、井戸、土坑、掘り込みなどを確認
⑱	国立名古屋病院	2002	愛知県埋蔵文化財センター	「名古屋城三の丸遺跡VII」(2005)	古墳時代から古代の集落遺構を確認 那古野城に関連すると思われる遺構を確認 江戸時代の庭園遺構、屋形に関する遺構群を確認 近代の名古屋陸軍病院の遺構を確認
⑲	東清水橋東交差点	2002	名古屋市教育委員会	「愛知県埋蔵文化財情報19」(2004)	三の丸東樹形付近の状況確認
㉑	名古屋城本丸搦手元御春屋門	2003・2005	名古屋市教育委員会	「特別史跡名古屋城跡本丸搦手馬出石垣修復工事発掘調査報告書」(2006)	近世の石垣、溝、ピット等を確認 本丸搦手馬出の修復が繰り返し行われていることが判明
㉒	名古屋城跡中下門跡	2003	名古屋市上下水道局水道本部	「名古屋城跡中下門跡発掘調査報告書一西区樋ノ口町地内400坪排水管布設工事にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書一」(2004)	戦国時代の整地面を確認 江戸時代の溝、土坑などを確認

NO	地点名	調査年	調査主体	報告書等	主な成果
㉒	地方簡易裁判所合同庁舎	2006～2007	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅷ』(2008)	那古野城に関連する中世・戦国期の堀、溝等を確認 近世の武家屋敷に伴う溝、井戸、土坑・ピットなどにより、屋敷表の範囲及び遺の一部が判明 近代の旧陸軍関連遺構である防空壕跡などを確認
㉓	名古屋城本丸御殿	2006～2008	名古屋市教育委員会 名古屋城総合事務所	『本丸御殿跡発掘調査報告書—第1,2,3,4次調査—』(2009)	本丸御殿跡の礎石、及び雨落溝、井戸、防火水槽、暗渠樹などの排水施設を確認。
㉔	樋ノ口町線	2009～2011	名古屋市緑政土木局	『特別史跡名古屋城跡発掘調査報告書(2011)―市道樋ノ口町線整備事業に伴う埋蔵文化財調査の記録―』(2011)	江戸時代の巾下水道に関わりのある木樋、木樋、木樹などを確認。辰之口大樋橋に敷設されている石畳の一部を確認
㉕	名古屋医療センター職員宿舎	2011	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡一職員宿舎建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書―』(2011)	近世の土杭、区画溝を確認
㉖	名古屋城本丸御殿	2012	名古屋城総合事務所	『本丸御殿跡発掘調査報告書―第5,6,7,8次調査―』(2012)	本丸御殿跡に関するカマド遺構、茶台蔵の礎石、本丸南樹形の石垣・暗渠溝などを確認
㉗	名城公園宿泊所、二之丸東駐車場地点	2014	名古屋城総合事務所	『名古屋城三の丸遺跡金シャヤ横丁事業に伴う発掘調査報告書』(2015)	近世の土杭、柱穴を確認 近代の兵舎跡と思われる石積遺構、礎石溝、コンクリート建物跡、貯水槽などを確認
㉘	名古屋城西之丸四番蔵	2014	名古屋市教育委員会	『特別史跡名古屋城跡発掘調査報告書(名古屋城西之丸)』(2016)	大正時代御大札に伴う整地層の確認 明治時代鉄合跡瓦片大量廃棄の痕跡 江戸時代初期土坑、戦国時代大溝などを確認
㉙	名城東小公園	2015～2016	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡第12次発掘調査(中央新幹線「名城非常口」地点)』(2017)	江戸時代屋敷地、道路跡、那古野城期の大溝などを確認
㉚	名勝名古屋城二之丸庭園笹巻山・栄耀山・多春園・御文庫・二子山・推現山・兵舎跡・奈芳・外縁	2013～2015	名古屋城総合事務所	『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書(第1次～第3次)』(2017)	10代藩主徳川斉朝により文政期に改変、整備された二之丸庭園に関わりと考えられる御茶屋や石組、礎石列、池跡などを確認
㉛	名古屋城本丸御殿地点	2015	名古屋市教育委員会	『本丸御殿跡発掘調査報告書―第9次調査―』(2017)	本丸表門桁形石垣の北側で石垣構築の掘方を確認
㉜	名古屋城西之丸三番蔵	2016～2017	名古屋市教育委員会	『特別史跡名古屋城跡西之丸(第2次)』(2018)	近世初頭築城期の盛土、近世後期の石組み水路、近代陸軍・離宮期の遺構を検出。戦国期以前の遺構・遺物も確認

NO	地点名	調査年	調査主体	報告書等	主な成果
㉓	名古屋城本丸内堀・小天守	2017～2018	名古屋城総合事務所	「特別史跡名古屋城跡 天守台周辺石垣発掘調査報告書」(2019)	内堀にて戦災の痕跡を確認 大天守台西面南隅、小天守台南面にて根石を確認
㉔	名勝名古屋城二之丸庭園 榮螺山・北園池・風信・笠巻山・横木屋・前庭・旧将校集会所跡・枯池・外縁	2016～2018	名古屋城調査研究センター	「名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書第4次～第6次」(2020)	北御庭では将校集会所の庭として改修された痕跡と近世の遺構面を確認 前庭では文政期遺構面とそれ以前の近世遺構面を確認
㉕	名古屋城本丸内堀	2019～2020	名古屋城調査研究センター	「特別史跡名古屋城跡本丸内堀発掘調査報告書」(2023)	
㉖	名古屋城二之丸地区二之丸御殿・向屋敷・馬場	2018～2019	名古屋城調査研究センター	「名古屋城二之丸地区試掘調査報告書」(2021)	表3参照
㉗	名勝名古屋城二之丸庭園	2019～2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中	
㉘	名古屋城二之丸地区二之丸御殿・馬場	2020～2021	名古屋城調査研究センター	「特別史跡名古屋城跡未告示地区(二之丸)発掘調査報告書第3次・第4次」(2023)	
㉙	名古屋城西之丸	2021～2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中	
㉚	表二之門附属土塀	2019～2022	名古屋城調査研究センター	「名古屋城表二之門試掘調査報告書第1次・第2次調査」(2023)	
㉛	名古屋城御深井丸・小天守	2020	名古屋城調査研究センター	整理調査中	
㉜	名古屋城本丸隔手境門	2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中	
㉝	名古屋城本丸天守穴蔵	2021～2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中	
㉞	名古屋城本丸天守背面石垣	2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中	
㉟	名古屋城櫓の首(小天守西)水堀側石垣	2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中	
㊱	名古屋城不明門北土橋石垣	2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中	

1. 2004年度（平成16）立会調査

2004年度立会調査は二之丸北西部にて翌年に行われた新世紀・名古屋城博のバビリオン建築に伴い行った。バビリオン建築は掘削を伴うため、新世紀・名古屋城博開催準備事務局が名古屋市教育委員会文化財保護室に調査を依頼した。調査は2004年11月20日と22日に名古屋市教育委員会文化財保護室が行った。

工事掘削は南北約45m、東西約25mの大きさで行われ、掘削深は25～55cmである。

層序は図4P1～P12で確認を行った。全体的に地表下約15cmまで現代に山砂で盛土されている。P1～P9、P11～P12で山砂の下層は灰色砂礫層が地表より55cm以下まで続いていた。P10で山砂層下から現代かく乱を確認した。

立会調査の結果、近世の包含層や遺構を確認することができなかった。また、遺物は出土しなかった。

2. 2008年度（平成20）試掘調査

2008年度試掘調査は二之丸北西部の整備の参考にするために約1㎡の調査区を5箇所設定した（図3 A1～A5）。調査は名古屋市教育委員会文化財保護室が名古屋城総合事務所の依頼を受けて行った。二之丸庭園では整備計画を策定するために各種調査を実施しており、この調査もあわせて実施された。

調査区は広場の中央にA3調査区、四隅にA1調査区、A2調査区、A4調査区、A5調査区を設定した。

なお、断面・平面図は名古屋市教育委員会文化財保護室から名古屋城総合事務所に提出された文化財試掘調査記録を再トレースしたものである。土層注記の内容及び層名は当時のままである。

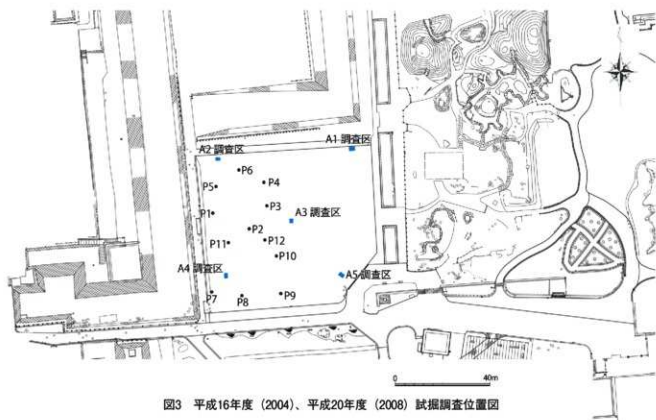


図3 平成16年度（2004）、平成20年度（2008）試掘調査位置図

A1調査区（図4）

A1調査区は二之丸広場北東隅に南北1m、東西1.6mの規模で設定した。

現代の公園化工事の際の整備層である1層、2層、3層を確認した。

3層下層で4層を確認した。4層の上面に薄くコンクリートを敷いている部分があるため、4層はある時期の地表面と考えられる。

4層下層でブロック土が多く混じる5層を検出した。この層は少量の礫が混ざっていた。調査区東側で5層を掘り下げたところ、コンクリートを検出した。コンクリートは、南北方向に延びて調査区外まで続く。また、東側も調査区外へと続く。コンクリートは東へ向かって下がっており、一部はかなり平滑（図4 斜線部着色部分）である。形状から溝状の構造物であったと考えられる。

6層と7層はコンクリートを覆うように堆積している。コンクリート構築物の時期は不明である。コンクリートが溝であれば7層は溝構築時の掘方埋土にあたり、6層は構築後の埋土である。コンクリートが廃棄され原位置を保っていない場合は6層と7層はかく乱である。現場の状況から陸軍関係の建物で近代あるいは戦後に撤去された痕跡と考えられる。

8層は上面に瓦片や小礫がやや密集している。掘削は8層上面までとしたため、層中に上面と同程度に瓦片や小礫を含むか確認することはできなかった。土質としては、黒色や橙褐色の砂シルト大型ブロックが混成している。これらは、名古屋城築城以前の熟田層台地上面に由来するもので、築城時に二之丸の盛土・整地土として敷き均されていた土が、再度掘り崩されて埋め立てられたものと考えられる。ブロックの粒径が大きく、検出面から条痕文土器片が採集されているため、付近に残存していた地山や中世以前の包含層由来の土である可能性も残る。8層は条痕文土器片の他に瓦片が出土している。時期の指標となる遺物は出土しなかったため、8層の形成時期を明らかにすることはできなかった。

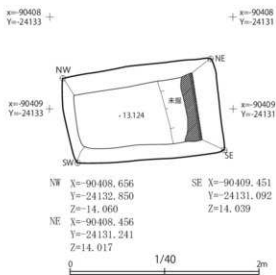
8層は明治時代初期（明治6年まで）の二之丸御殿除却に伴う整地土の可能性が高いと考えられるが、近世のうちに部分的な建替えが行われた結果である可能性も否定できない。

A2調査区（図5）

南北0.7m、東西1.3mの規模で設定した。

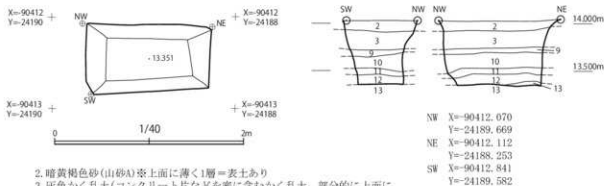
現代の整備層である2、3、9～12層を確認した。9層上面に芝生を敷いた痕跡が確認できることから、現代のある時期に整備された芝生面である。その後、2～3層を造成し、現在みられる芝生面が整備された。12層でガラスやコンクリート片が混じることから12層より上層は近現代の盛土である。

12層の下層でブロック土が多く入る13層を検出した。13層は暗橙褐色ブロックが多く混じる土からなり、瓦片や礫が多く入る。A1調査区の8層と同様に地山由来のブロックと考えられる。13層上面の標高は13351mとA1調査区の8層上面（13124m）と近似している。13層とA1調査区8層は同じ層と考えられる。



1. 表土(黒色土)
2. 暗黄褐色 灰色かく乱土
3. 暗灰色かく乱土(上面の一部に薄くコンクリート敷きあり、旧地表面の痕跡と考えられる。)
4. 黄灰色ブロック土(数cmの黄褐色、茶灰色、黒色、灰色ブロックが混成、小石まばら)
5. 暗灰色砂シルト
6. 暗灰色砂シルト
7. 暗灰色砂シルト
8. 互混じりブロック土(10cm以下のブロックを不均等に含む灰色砂シルト)

図4 A1調査区 平面・断面図



2. 暗黄褐色砂(山砂A)※上面に薄く1層=表土あり
3. 灰色かく乱土(コンクリート片などを密に含むかく乱土。部分的に上面にモルタルを敷いていた痕跡あり)
9. 暗黄褐色砂(山砂B)
10. 暗灰色ブロック混成土
(黒、暗灰色のブロックが主体となる。橙褐色ブロックがまれに混じる)
11. 暗灰色砂質土(小石、瓦片をまばらに含む。不均質にシルト粒が混じる)
12. 暗灰色ブロック混成土
(黒、暗灰色のブロックが主体となる。橙褐色ブロックがまれに混じる。10～12は一連の盛土である可能性が高い)
13. 暗橙褐色ブロック混成土
(華大以下の暗橙褐色ブロック及び暗灰色ブロックが混成する。小石、瓦片やや密。A5床面と同じ土と考えられる。近代以降の造成土か)

図5 A2調査区 平面・断面図

A3調査区 (図6)

南北1.2m、東西0.9mの規模で設定した。

2層から18層までは、近現代の盛土層である。A3調査区9層はA2調査区の9層と同様に上面で芝生痕を敷いた痕跡を確認した。14層はよく締まった硬化面である。

17層から鉄筋コンクリート片が出土したため近現代の整地土層と推定した。18層は、土質が17層と共通するが、土色の違いから区分した。一連の造成である可能性が考えられる。

16、9、17層を掘り込む15層からコンクリート盤を検出した。コンクリート盤の用途は不明である。コンクリート盤は東端以外が調査区外に続くため、規模は不明である。東端は直線的で座標北から4.7°西に傾いている。近代に建てられた陸軍建物の軸は座標北から約5°西に傾いているため、コンクリート盤は兵舎に関連する遺構と考えられる。盤面の標高は約13.67mである。

19層は均質なブロック混成土である。土質は本丸御殿周辺の近世盛土層に近似しており、かなり硬く締まっている。近世築城時の造成盛土である可能性も考えられる。

A4調査区 (図7)

調査区A4は長軸方向北西—南東である。長軸(北東壁、南西壁)1.4m、短軸(北西壁、南東壁)1.3mの規模で設定した。この地点は、南東方向の舗装された園路から、二之丸広場に入庫する簡易舗装部分に

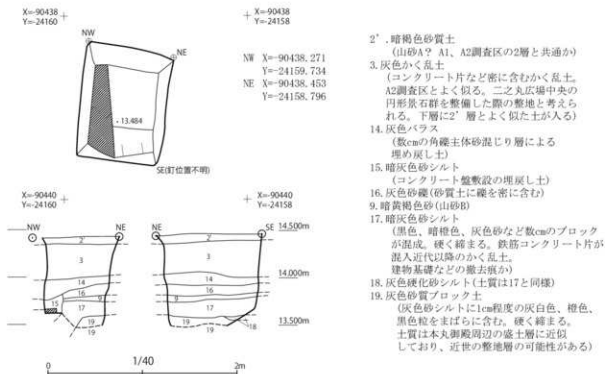


図6 A3調査区 平面・断面図

- 2' .暗褐色砂質土
(山砂A? A1、A2調査区の2層と共通か)
- 3.灰色かく乱土
(コンクリート片など密に含むかく乱土。A2調査区とよく似る。二之丸広場中央の円形景石群を整備した際の整地土と考えられる。下層に2'層とよく似た土が入る)
14. 灰色バラス
(数cmの角礫主体砂混じり層による埋め戻し土)
15. 暗灰色砂シルト
(コンクリート盤敷設の埋戻し土)
16. 灰色砂礫(砂質土に礫を密に含む)
9. 暗黄褐色砂(山砂B)
17. 暗灰色砂シルト
(黒色、暗褐色、灰色砂など数cmのブロックが混成。硬く締まる。鉄筋コンクリート片が混入近代以降のかく乱土。建物基礎などの撤去痕か)
18. 灰色硬化砂シルト(土質は17と同様)
19. 灰色砂質ブロック土
(灰色砂シルトに1cm程度の灰白色、橙色、黒色粒をまばらに含む。硬く締まる。土質は本丸御殿周辺の盛土層に近似しており、近世の整地層の可能性がある)

位置する。地表面は、南東から北西向きの進入方向に従って緩やかに高くなっている。掘削位置の選定にあたって、事前の調査によってA4調査区周辺は現地表下約20cmにコンクリート敷が広がることが想定された。このコンクリート敷と埋設された配水管を避けて調査区を設定した。

地表から約80cm下からコンクリート盤を検出した。コンクリート盤は座標北から4.6°西へ傾いていた。A3調査区のコンクリート盤とは18m離れており、検出位置を考慮すると両者は接続しない。調査区A3のコンクリート盤と標高、仕上げ方、設置軸の角度が同様であることから同じ役割をもつ遺構であると考えられる。

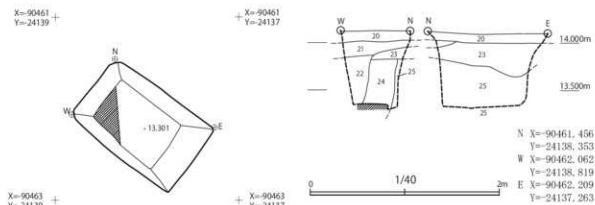
コンクリート盤より下層は地盤改良剤が混じった土であるため、非常にしまりが強く、これ以上の掘削はできなかった。この調査区で確認した土層は、全て現代の埋め戻し土であった。A4調査区から近世、近代遺構を確認することはできなかった。

A5調査区 (図8)

調査区A5は南北約14m、東西約0.8mの規模である。この地点は、広場南西部の芝生敷き平坦面である。南及び西側の園路面よりも30~50cm高くなっている。a~f層は現代の整地層である。

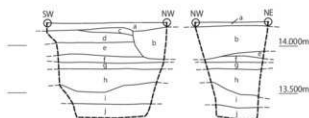
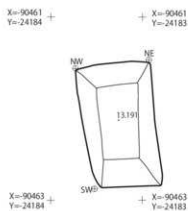
f層はA2、A3調査区の9層と同じ山砂で上面から芝生を敷いた痕跡を確認した。a層からi層までは現代のかく乱土である。

j層は灰色砂質砂シルト土で黄褐色・灰白色ブロックを多く含む。瓦片と円礫が非常に多く入る。調査区A1の8層や調査区A2の13層と同様に熟田層に由来するブロックを多く含む。近代初頭の二之九御殿の破却に伴う層である可能性が高いと考えられるが、近世まで遡る可能性も否定できない。



20. 黄褐色砂質土(A5調査区の山砂Cに類似。上面を砂礫層が覆う)
21. 灰色砂礫(小石まばらな砂質土)
22. 暗灰色かく乱土(瓦礫主体)
23. 灰色かく乱土(厚さ20cm程度のコンクリート盤が敷設されている。
この層の上面に現地で付設されたような雑な仕上げのもの。)
24. 暗灰色かく乱土(砂質土に礫を密に含む。A3 15層と同様か)
25. 暗灰色かく乱土(黄褐色ブロックやコンクリート片、瓦片などを密に含む。)

図7 A4調査区 平面・断面図



NW X=90461.561
 Y=24183.738
 NE X=90461.467
 Y=24182.931
 SW X=90462.870
 Y=24183.525



- a. 暗褐色砂礫層(表土)
 b. バラス層(角礫主体)
 c. 灰色砂層(客土。b層に伴う土か)
 d. 黄褐色砂層(山砂。締まりなし)
 e. 灰色砂礫層(硬く締まるかく乱土)
 f. 暗黄褐色砂層(山砂B。上面に芝生を敷いた痕跡がある)
 g. 黒色かく乱土①(砂シルト。締まりなし)
 h. 黒色かく乱土②(砂シルトに1~2cmの暗褐色、黒色ブロックをやや密に含む。締まりなし。アスファルト片などをやや密に含む)
 i. 暗褐色土(円礫をやや密に含むシルト質土。硬く締まる。まれに瓦片が入る)
 j. 暗褐色土(灰色砂シルトに黄褐色、灰白色の1~2cmブロックを密に含む。瓦片、円礫を密に含む。)

図8 A5調査区 平面・断面図

3. 第1次（2018年度）・第2次（2019年度）調査

第1次・第2次調査は二之丸北西部で3箇所、南部で7箇所に調査区を設定した。二之丸地区全体に満遍なく調査区を配置することで、全体的な遺構残存状況を確認した。調査結果をまとめた報告書を2021年（令和3）に刊行している。

近世の遺構、遺構面を確認できたのは調査区2、3、4、5、10の5地点である。近代の遺構面、遺構を確認できたのは、調査区2、3、4、5、7、8、9、10の8地点である。

二之丸北西部に位置している調査区1と6は近世及び近代の遺構を確認できなかった。調査区7で近代の配管を確認した。出土した鑄鉄管は後述する調査区15の管より径が大きいが、二之丸庭園では出土例がある。近世遺構は確認できなかった。

二之丸南部は遺構面が良好な状態で残存している。近世の二之丸南部は二之丸御殿の南にあたり調査区3では建物の礎石と思われる石を確認している。調査区3は「御城二之丸図」によると「局」の一角にあたる。調査区10から石組溝を確認した。調査区2、4、5、8で整地層を確認した。整地層から少量の瓦が出土している。時期を特定できる遺物はなく形成された時期は不明である。調査区8では2回にわたる整地が確認されている。

調査区設定の目的と出土遺構等の一覧は表3の通りである。

表3 二之丸地区第1次・第2次調査 一覧

調査区名	調査区設定の目的	調査結果	近世		近代		備考
			出土遺構	標高 (m)	出土遺構	標高 (m)	
1	御殿北西側の建物遺構の確認	近世遺構面を確認することができなかった	—	—	—	—	
2	香屋遺構の確認（東二之門）	近世遺構を確認したが香屋との関連は不明	溝、土坑	130	遺構面のみ	133	
3	御殿南側の建物遺構の確認	具体的な建物比定はできなかったが、御殿の一部と考えられる礎石を確認	礎石、土坑	130	遺構面のみ	131	
4	御殿南側の建物遺構の確認	近世遺構を確認することができなかった	遺構面のみ	128	石列	129	
5	馬場関連遺構の確認	近世遺構を確認したが馬場との関連は不明	土坑	129	コンクリート基礎	130	現代のかく乱の底から遺構を検出
6	御殿北西側の建物遺構の確認	近世遺構面を確認することができなかった	—	—	—	—	
7	御殿南側の建物遺構の確認	近世遺構面を確認することができなかった	—	—	暗渠	127	
8	御殿南側の建物遺構の確認	近世遺構を確認することができなかった	遺構面のみ	129	溝、建物壁	130	
9	香屋遺構の確認（大手二之門）	近世遺構面を確認することができなかった	—	—	遺構面のみ	130	西壁のみで近世遺構面を確認
10	馬場関連遺構の確認	近世遺構を確認したが馬場との関連は不明	暗渠、土坑	127	暗渠	128	

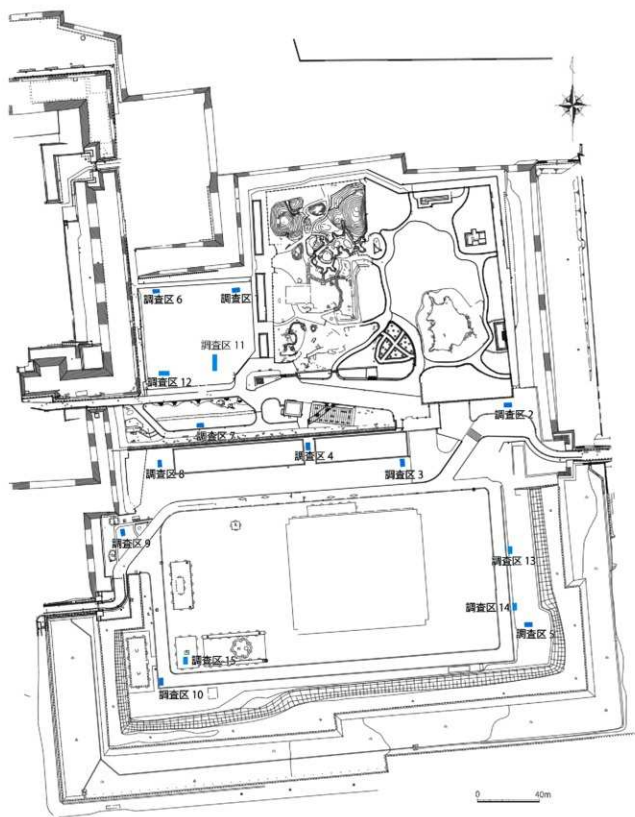


図9 二之丸地区第1次～第4次調査発掘調査地点

第3章 調査成果

第1節 調査の概要

1. 調査区設定の目的

この章では2021年から2022年にかけて発掘調査をおこなった調査区11～調査区15（図9）について記述する。

調査区11と調査区12は二之丸北西部に設定した。調査の目的は前章で述べた2018年度及び2019年度調査の調査区1、6、7と同様に二之丸御殿とそれに関する遺構の検出である。「御城二之丸図」や「尾州二之丸御指図」等近世の二之丸を描いた絵図によると二之丸北西部は二之丸御殿が広がっていた。近代に入ると二之丸御殿は撤去され、陸軍施設が立ち並んでいたことが、アメリカ軍が撮影した航空写真や終戦直後の都市計画図等で見ることができる。

調査区11は二之丸御殿の南辺にあたるように設定した。調査区の北半分は近代に陸軍兵舎が存在した所である。二之丸御殿礎石の検出を目的とした。また、兵舎内部空間における近世遺構の残存状況を確認も目的とした。

調査区12は二之丸御殿と大手馬場から埋門へ続く通路の境界に設定した。塀や溝等の境界を示す遺構の検出を目的とした。

調査区13～15は二之丸南部に設定した。調査の目的は前章で述べた2018年度及び2019年度調査の調査区5、10と同様に馬場とそれに関する遺構の検出である。近世の二之丸南部は絵図によると二之丸御殿の南に建てられた向屋敷と馬場が広がっていた。近代に入ると陸軍施設が立ち並んでいたことが、北西部と同様にアメリカ軍が撮影した航空写真や終戦直後の都市計画図等で見ることができる。

調査区13は向屋敷の南限を確認するために設定した。向屋敷と馬場のある空間を隔てる塀や溝等の境界を示す遺構の検出を目的とした。

調査区14と調査区15の目的は前章で述べた2018年度及び2019年度調査の調査区5、10と同様に馬場に関する遺構の検出である。調査区14は馬場の東辺、調査区15は馬場の南辺に設定し、馬場に関する砂敷き面と土居の検出を目的とした。馬場は「御城二之丸図」（巻頭5）や『金城温古録』に描かれている。

2. 基本層序

北西部（調査区11、12）

図11で示したように山砂や現代の廃棄物を含む土が1m～1.5m堆積している。図10、12 1～5層が現代層にあたる。近世及び近代遺構は5層下で確認することができるが、5層によって一部が破壊されている。

5層の影響が少ないところで近代遺構面（図11 7～9層）を検出した。近代遺構面は調査区11で標高約13.2m、周辺では2008年度調査区A1、A2、A5では標高13.1～13.4mで確認した。

近世遺構面も5層の影響が少ないところで確認することができた。固い地山由来と考えられるブロックが多く混じる砂質土からなる層を（図11 15層）標高約13.0mで確認することができた。

南部（調査区13～15）

二之丸南部は現代の愛知県体育館建設や駐車場造成時に盛土されたため、全体が標高約13.5mとなっている。現代の盛土が約0.4～0.5m堆積している。駐車場造成時に敷かれたバラスや芝敷に伴う黒色土が表土（図13、14 1層）であり、その下層に現代遺物を多く含む盛土がされていた。

近代遺構面は標高約13mで砂利や石炭殻を入れて締め固められた黒色土層（図15 11層）である。黒色土層の直下は石炭殻が混じる層（図15 12層）が0.1～0.2m堆積している。

近世遺構面は標高約12.7mで面的に広がる（図15 15、16層）。15層は暗褐色のやや粘質な土で黄色や橙色のブロックが混じり、16層は黒褐色のやや粘質な土である。15層、16層に含まれる黄色や橙色のブロック土は地山に由来する土と考えられる。

第2節 遺構

調査区11（図10,11）

調査区11は南北10m、東西2mの規模で設定した。

標高約13.9mで現代のポリ塩化ビニル管（以下、「塩ビ管」という）を確認した。塩ビ管が現在も使用されている可能性があったため、塩ビ管を避けて調査区東側に幅50cmのトレンチを設定した。約70cm掘り下げたところ、トレンチ北側がかく乱の影響をあまり受けていないことが確認できたため、北側を50cm拡張し、幅1mのトレンチとした。南側は現代のかく乱が地表より130cm以下まで続いた。作業上の安全を考慮してこれ以上の掘削を行わず、トレンチの拡張も行わなかった。

(1) 層序

この調査区の層序は上から山砂からなる表土（1層）、造成土（2層）、砂質土（3層）、造成土（4層）、造成土（5層）である。いずれも1970年代の公園化工事の際に入れられた土砂と考えられる。

5層は現代遺物を多く含む層である。土器類、陶磁器類、炆器類、瓦類、金属製品等近世から現代にかけての遺物が出土した。

9層は2つのコンクリート基礎掘方（7、8層）に掘り込まれている層である。9層はコンクリート基礎Aとコンクリート基礎Bの間のみ存在する。列Aの北側と列Bの南側は5層によってかく乱されているため、確認できなかった。

標高約13.2mで10、11層を確認した。10層と11層は面的に広がらないが、土質から同一と考えられる。遺物は土師質の甕が1点のみ出土している。

10、11層の下層で15層が面的に広がる。15層の検出高は標高13.0m～13.15mで、13.0mで面的に広がる。調査区北側でSK2（12層）に、調査区中央部でSK1（13層）に掘り込まれている。15層から第4段階末^{※1}の陶器皿（図17 5）が出土しているため、16世紀末以降に盛土された層と考えられる。

(2) 近代遺構

コンクリート基礎

調査区南側にコンクリート基礎Aとコンクリート基礎Bを確認した。AはBに比べ丁寧に成型され、頂部は段を持つ。列Aの南北で掘方(6、7層)を確認した。6層、7層はどちらも締まりのない暗褐色砂質土である。遺物は近代の陶器碗(図17 6)と近世の軒平瓦(図17 7)の他、瓦類、釘が出土している。

BはAの南側に位置している。Aより雑に成型されており、明瞭な角を持たない。掘方は北側で確認できた。南側の掘方はかく乱によって失われていた。掘方から遺物は出土していない。

AとBの間にある層(9層)が近代遺構面と考えられる。Aの北側及びBの南側はかく乱によって近代遺構面は失われていた。

(3) 近世遺構

近世の盛土と判断した15層を掘り込んでいるSK1とSK2から近代以降の遺物が出土しなかったことからSK1とSK2は近世遺構と考えた。

SK1

SK1の埋土(13層)は赤褐色の締まりのない、きめ細かい砂質土である。調査区内で南北約40cm、東西約20cmの規模で検出した。南側でコンクリート列Aとその掘方に削られているため全体の規模は不明である。SK1埋土を掘削していないため深さは不明である。北側で15層を掘り込んでいる。

SK2

SK2は調査区北側に広がる土坑である。SK2は南北1m、東西端は調査区外に広がっていくため、正確な規模は不明である。SK2の埋土(12層)は亜円礫が敷かれているような状態で多く含み、締まりがなくグライ化した砂質土からなる。亜鉛礫は10cm四方に3~4つの密度で検出した。大きいもので径5cm、小さいもので径2cmである。石質は礫の大半がチャートで、庄内川や木曾川など名古屋城周辺の河川で見ることができる。亜円礫はSK2内に収まらず、北側で14層上に広がる。礫はSK2の中央部に集中しており、外側はまばらであった。

上面から近世の瓦や中世以前の遺物(図17 3、4、8)が出土した。

12層上に上面が扁平に加工された硬質砂岩を検出した。扁平部が傾いた状態で検出されたことと掘方が



写真1 SK2 (南から撮影)



写真2 SK1 (北から撮影)

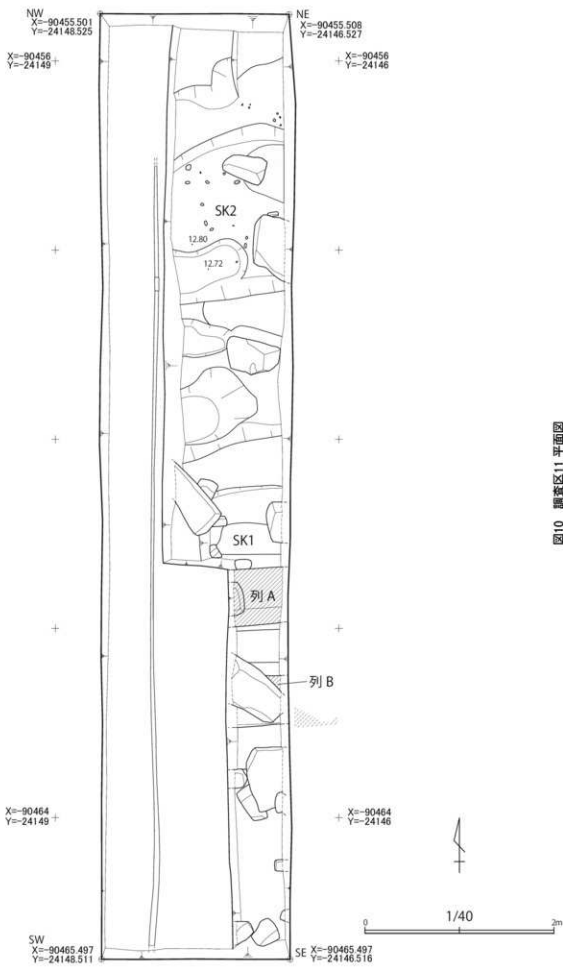
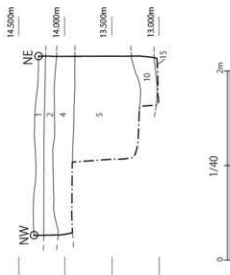
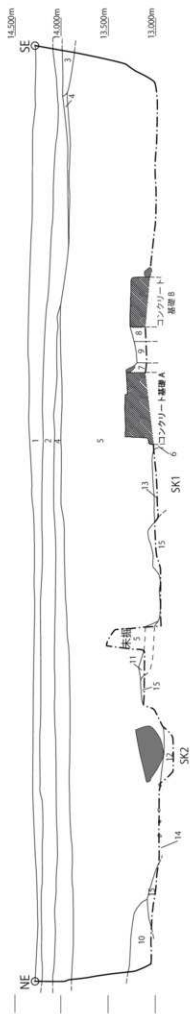


图10 调查区11平面图



1. 黄褐色7.5V5/6 砂質土、しまりなし、砕石を多く含む
2. 褐色7.5V4/5 砂質土、しまりなし、砕石を多く含む
3. 暗灰黄色2.5V5/2 砂、しまりなし
4. にぶい黄色2.5V6/4 砂質土、しまりあり(非常に硬い)、砕石、コンクリート片を含む
5. 褐色7.5V4/3 やや砂質土、しまりあり、瓦片、砕石、コンクリート片、タタキ片を含む
6. 暗褐色10YR3/4 砂質土、しまりなし、石、コンクリート片を含む
7. 暗褐色10YR3/4 砂質土、しまりなし、石、コンクリート片を含む
8. 褐色7.5YR4/3 砂質土、しまりあり、石、コンクリート片を含む
9. 暗褐色7.5YR3/3 砂質土、しまりありなし、褐色、黄色、白色ブロックを含む
10. 黒褐色7.5YR3/1 粘質土、しまりあり、黄色、白色、褐色ブロック、タタキ片を含む
11. 黒褐色7.5YR3/1 粘質土、しまりあり、黄色、白色、褐色ブロック、タタキ片を含む
12. 褐色10YR4/1 シルト、しまりなし、グライ化した砂を多く含む、3~7cm径サヤート面和礫を多く含む
13. にぶい、黒褐色5YR4/3 きめ細かい砂質土、しまりなし、黄味土ブロックを含む、3~7cm径サヤート面和礫を多く含む
14. 褐色10YR4/1 砂質土、しまりなし、グライ化した砂を含む、3~7cm径サヤート面和礫を多く含む
15. 褐色10YR4/6 きめ細かい砂質土、しまりあり、褐色、黄色、白色ブロックを含む

図11 調査区11 断面図

確認できなかったことから原位置を保っていないと考えられる。石材の上面が扁平に加工されていることから礎石や東石、二之丸庭園や二之丸御殿の中庭の景石として使われた石材である可能性が考えられる。

SK2は埋土に含まれる植物遺体や珪藻等を確認するために自然科学分析を行った（第5章参照）。

調査区12（図12）

調査区12は南北2m、東西6mの規模で設定した。

調査区のはほぼ全体がかく乱されていた。安全を考慮して地表から約1mの深さで幅約75cmの段を設けた。地表から約1.3mの深さまで掘削を行ったところ、1m以上あるコンクリート片やレンガ塊、石材が多く出土した。安全な作業空間が確保できなかったため、これ以上の掘削を中止した。

(1) 層序

層序は現代の造成土まで調査区11と基本的には同じである。1～2層と5層は調査区11の1層と5層にそれぞれ共通する現代の盛土である。5層は15世紀の宝篋印塔の部材（図20 43）や長さ約80cm、幅約60cm、厚さ約40cmの花崗閃緑岩製築石など中近世の遺物や陸軍施設の部材、現代のコンクリート等を包含して調査区床面まで広がる。

現代の造成土より下層は5層によって調査区11よりも大きくかく乱されていたため、面的に広がる層を確認することができなかった。しかし調査区西側で現代以降の遺物を包含しない層（8～9層）を確認した。8～9層の下層、標高約13.1mで11層を確認した。

8層は標高約13.6mで検出したが面的に広がらない。地山由来のブロックと黒色粘質土ブロックが入る黒褐色のやや砂質土からなり、瓦片や礫がまばらに入る。層中から近世から近代にかけての陶磁器や瓦、近代のレンガ（図18 13～16）が出土した。

9層は標高約13.3mで地山由来のブロックがまばらに入り、雲母片を多く含む、やや粘性がある暗褐色砂質土である。9層は調査区南西隅で東西に1m程度しか残存しておらず、東端と南端は5層によって掘り込まれている。

11層は地山由来のブロックがまばらに入る砂質土からなる層である。少なくとも調査区床面である標高約12.7mまで続く。11層は標高約13.2mの高さで調査区の北西に広がり、南端と東端は5層にかく乱されている。

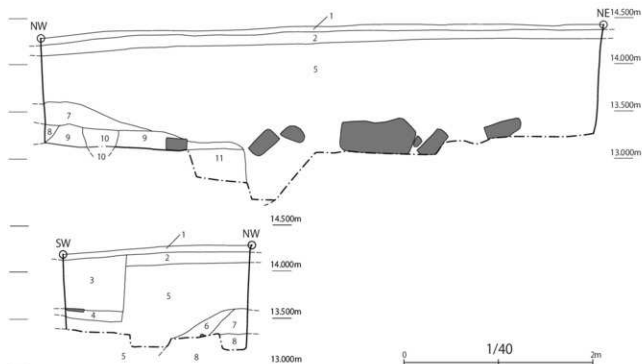
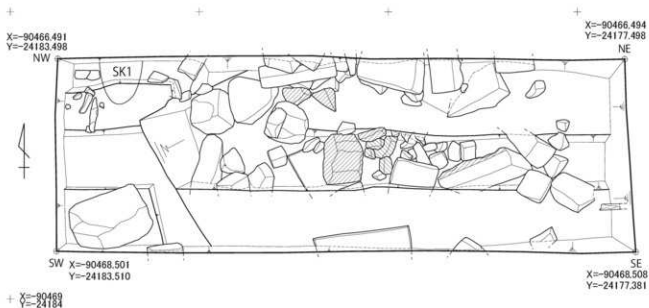
標高12.7mで安全のため掘削を中止した。

(2) 近代遺構

明確な遺構面を確認することができなかった。

SK1

SK1は東西約50cm、北端は調査区外まで続くため南北の規模は不明である。完掘していないため深さは不明である。9層を掘り込んでいる。土坑の埋土（10層）は9層と同様に瓦片や礫がまばらに入る。掘り込みは11層まで達する。



1. 黄褐色2.5YR5/6 砂質土 しまりなし
2. 黄褐色2.5YR5/6 砂質土 しまりなし
3. 褐色7.5YR4/3 やや粘質土 しまりなし
4. 灰オリーブ5Y4/2 砂質土 しまりなし
5. 褐色7.5YR4/3 やや砂質 しまりあり 瓦片、砕石、コンクリート片、タタキ片を含む
6. 暗褐色10YR3/4 やや粘質土 しまりあり 5mmの円礫をわずかに含む 黒、黄色ブロックをわずかに含む
7. にぶい黄褐色10YR4/3 やや粘質土 黒、黄色ブロックを多く含む 近世以降の瓦片を含む
8. 暗赤色5YR3/2 やや粘質土 しまりあり 黒、黄、赤褐色ブロックを含む こぶし大の円礫、瓦片を含む
9. 黒褐色7.5YR3/1 やや砂質土 黒、黄、赤褐色ブロックを含む
10. 黒褐色10YR3/1 やや砂質土 黒、黄、赤褐色ブロックを含む
11. 黒褐色10YR3/4 砂質土 黒、黄ブロックをわずかに含む 雲母片を含む

図12 調査区12平面・断面図

(3) 近世遺構

明確な遺構面を確認することができなかった。しかし調査区11の近世遺構面と高さや土色が類似していることから11層が近世層である可能性が考えられる。なお、11層から遺物は出土していない。

調査区13 (図13)

調査区13は南北4m、東西2mの規模で設定した。

調査区13と調査区14の位置する地点の現地表面の標高は二之丸北西部や庭園部分の現地表面より1m程度低い標高約13.5mとなっている。現地表面から20~50cm掘削したところで近世遺構面と考えられる面(20層)を確認したため、20層で遺構の検出を行った。調査区中央で南北方向に延びる金属製管掘方を完掘し、断面で層序の確認を行った。20層の下層を確認するために、同様の理由でサブトレンチを調査区北側に設けた。また、20層に掘り込まれている砂層(23、25層)を確認するために調査区南側で南北160cm、東西40cmの範囲で標高約12.4mまで掘削を行った。

(1) 層序

現代の駐車場造成に伴う厚さ5~10cmの造成土(1層)を除去すると、10~25cmの灰褐色シルト質土層(4層)と4層から掘り込まれたかく乱(2層)と、同じく4層から掘り込まれた管掘方(3層)を確認した。

4層の下層からコンクリート塊と礫混じり灰色シルト層が北に向かって厚く堆積していた(6層)。

3層の床面で金属製管を確認した。後述する調査区15の鋼鉄管とは大きさ、塗装、掘方の層位が異なっている。

標高13.3mから12.9mまで地山ブロックを含む整地層を確認した(8層)。層中からマンガン軸を施した常滑の瓦(図19 30)が出土した。また、9層でガラス片、10層でコンクリート片を含むため、10層までが現代層である。

調査区北西隅の標高13.1mから12.8mでは整地層の下で遺物を含まない灰色粗砂の層がみられた(13層)。

標高12.8mから12.9mにかけて地山由来のブロック土を含む、整地層と考えられる層を確認した(20層)。金属製管掘方北壁で灰色粗砂層を確認した(23、25層)。25層は24層に掘り込まれているが、23層は24層上に堆積していることから、2時期にわたって灰色の粗砂を盛土していたと考えられる。23層は20層によって削られ面的に広がらない。時期を特定できる遺物は出土していない。

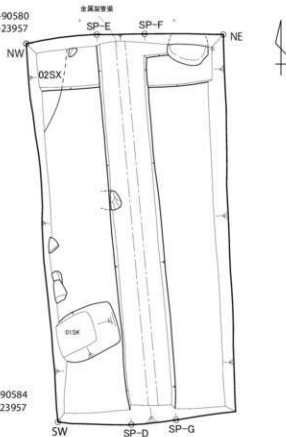
掘削は24、25層を掘りきったところで終了した。24、25層の下層は26層で瓦片と地山由来のブロック土を含んだ層である。26層は標高約12.4mで面的に広がっていた。26層上面から酸化コバルト軸が施軸された近代の磁器碗1点が出土しているため、少なくとも25層までが近代層と考えられる。

調査区13では近世遺構面を確認することができなかった。調査区11、12、15では標高12.8~13.2mで近世遺構面を検出した。既往の調査でも同様の傾向にあることから近世遺構面は調査区13内においては近現代にかく乱されている可能性が高い。

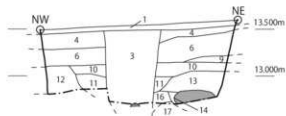
(2) 近代遺構

北壁際で40cm四方程度の扁平な川原石を確認した。石上面の高さは標高12.9mとなる。調査区13周辺は

X-90580
Y-23957



X-90584
Y-23957



1. 褐灰色 10YR6/1 シルト質土 砕石を多く含む
2. 黄灰色2.5Y5/1砂質土 砕石を含む
3. 褐灰色7.5Y6/1シルト質土 コンクリート片、砕石を含む
4. 褐灰色 10YR5/1 シルト質土 調査区14の2層と同一
5. オリーブ黒色7.5Y3/1シルト質土 礫をわずかに含む
6. 灰色10Y5/1シルト質土 コンクリート片、砕石を含む
7. 黄灰色2.5Y6/1砂質土 黒、黄色ブロックを含む
8. 黄灰色2.5Y4/1シルト質土 黄、黒ブロックを含む
9. 灰色10Y4/1砂質土 礫、ガラス片を含む
10. 灰色10Y4/1シルト質土 礫、コンクリート片を含む
11. オリーブ黒色10YR3/1シルト質土 黄色ブロックをわずかに含む
12. 灰色10Y5/1砂質土 粗い砂からなる
13. 黄灰色2.5Y4/1シルト質土 黄、黒ブロックを含む
14. オリーブ黒色5Y3/1シルト質土 瓦片を含む、黄灰色ブロックを含む
15. 黄灰色2.5Y4/1シルト質土 黒色ブロックを含む、黄灰色ブロックをわずかに含む
16. 黒褐色2.5Y3/1シルト質土 黒、黄灰色ブロックを含む
17. オリーブ黒色5Y3/1シルト質土 黄灰色ブロックをわずかに含む
18. 灰色10Y7/1 砂質土
19. 褐灰色7.5YR5/3シルト質土 黄、黒色ブロックを含む
20. 黒褐色2.5Y3/1シルト質土 瓦片を含む 黄、黒ブロックを多く含む
21. オリーブ黒色7.5Y3/1シルト質土 瓦片、礫を含む 黄、黒色ブロックを含む
22. 褐灰色10YR4/1シルト質土 黄灰、黒色ブロックを含む
23. 灰色10Y6/1砂質土 粗い砂からなる
24. 黄灰色10YR6/1砂質シルト 黄灰色ブロックを含む
25. 灰色10Y6/1砂質土 粗い砂からなる 黄灰色ブロックをわずかに含む
26. 黄灰色2.5Y4/1シルト質土 瓦片を含む、黄灰色ブロックを含む

0 1/40 2m

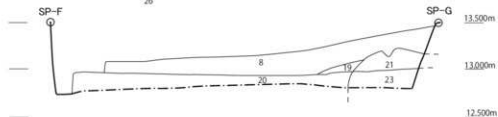
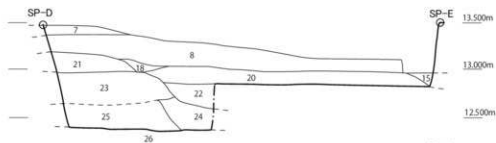
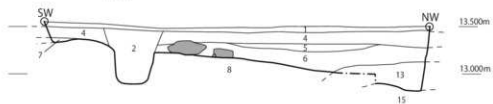


図13 調査区13 平面・断面図

近代に厩が存在したことから厩の礎石又は東石の可能性が考えられる。

(3) 近世遺構

明確な遺構面を確認することができなかった。

調査区14 (図14)

調査区14は調査区13から南へ約3.5mの地点に設定した。南北4m、東西2mの規模で設定した。

調査区北側では標高約13.2mの地点から花崗岩製切石を4石検出した。花崗岩製切石の検出面にて遺構の検出を行った。

調査区南側で南北方向に延びる金属製管掘方を完掘し土層の観察を行った。金属製管は調査区13と同じ管である。また、土層の堆積状況を確認するため、調査区北西と南東にサブトレンチを設定した。

(1) 層序

厚さ10cmの駐車場造成に伴う固く締まった砂礫混じりの層（1層）を除去すると、標高13.2mから13.5mまでコンクリート塊と礫を多量に含む褐色シルト質土層がみられた（5層）。遺物は瓦と石油製品が主を占めた。5層は調査区13における4層と土質と検出した高さが同一であるため、対応する層と判断した。

調査区中央では調査区13と同様にSD1（3、4層）を確認した。現代の管掘方から瓦片、陶磁器片、石油製品、花崗岩製切石が出土した。

標高13.1m～13.2mで上面が固く締まった褐色シルト質土層（8層）が調査区全面にみられた。遺物は出土していない。

10層からはガラス、煉瓦、瓦等が出土した。

調査区北側標高約13.2mで表面が平滑な長方形の花崗岩製切石を4石検出した。切石2の大きさは長さ約98cm、幅約42cm、厚さ約10cmである。他の切石は端部が調査区外に至るため、規模は不明であるが切石2と同程度の大きさを持つと考えられる。切石2～4は表面が平滑になるように研磨されている。切石1は平滑な面が底部になっている。SD1直上から出土した切石（切石1、2）は現代の管掘方を掘削する際に掘り返され、管渠上に配置されたと考えられる。切石は大きさから名古屋市電の軌道に敷かれていた敷石である可能性が高い^{*2}。

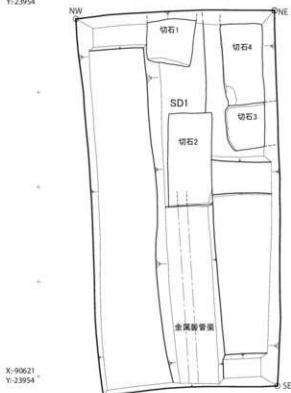
南東サブトレンチで、標高約13mでの暗灰色シルト質土層（13層）を確認した。13層中でレンガが出土した。また、13層を切る12層からコンクリート片が出土した。

(2) 近世遺構

標高約13mの地点で掘削を終了した。調査区底面である13層から近代の遺物が出土していることから、近世遺構は確認できなかった。調査区13では標高約12.9mから、調査区15では標高12.8～12.9mで近世遺構が検出されたことを考えると近世遺構面まで到達しなかった可能性が高い。

X:90617
Y:23954

X:90617
Y:23951



X:90621
Y:23954

X:90621
Y:23951

1. 褐灰色10YR6/1シルト質土 礫石を多く含む
2. 褐灰色10YR5/1シルト質土 現代遺物を多く含む
3. 黄灰色2.5Y4/1シルト質土 現代遺物を多く含む
4. オリーブ黒色5Y3/1シルト質土 現代遺物を多く含む
5. 褐灰色 10YR5/1 シルト質土 調査区13の4層ど同一
6. 黒褐色10YR3/1シルト質土
非常に硬くしまる 黄色ブロック(地山由来)を含む
7. 褐灰色10YR4/1シルト質土 礫、炭化物、瓦片を含む
8. 褐灰色7.5Y5/1シルト質土
非常に硬くしまる 黄色ブロック(地山由来)を含む
9. 黄灰色2.5Y5/1シルト質土 現代遺物を多く含む
10. 浅黄色2.5Y7/4シルト質土 しまりあり
11. 暗灰色N3/シルト質土
12. 黒褐色10YR3/1シルト質土 コンクリート片を含む
13. 褐灰色10YR4/1シルト質土 レンガ片、瓦片を含む

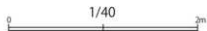
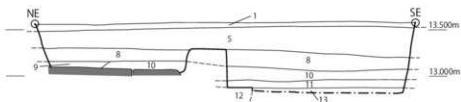
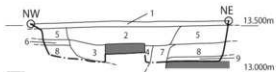


図14 調査区14平面・断面図

調査区15 (図15)

調査区15は愛知県体育館の西側にある芝生敷空間に南北4m、東西2mの規模で設定した。周辺は標高約13.5mで愛知県体育館に伴う芝生敷空間が広がっている。

全体を12.9mまで掘り下げた後、調査区北側で近世遺構の残存状況を確認するために北西隅にサブトレンチを設定した。近世遺構が良好に残存していたため、サブトレンチを南へ拡張し、近世遺構の検出を行った。

(1) 層序

調査区15の層序は現代造成土(1~8層)、近代の造成土(11~12層)、近世盛土(16層)からなる。

芝生敷空間を造成するために山砂が約50cm盛土されている(1層)。1層を除去すると砂利を多く含む灰黄褐色で砂質の硬化面を検出した(2層)。2層の下層にやや締まった暗褐色砂質土を検出した(3層)。4層~8層も3層と同様にやや締まった土で、明確な面を持たない。

8層と9層の間に面を持ったコンクリートを確認した。コンクリートは標高約13mの地点で東西約50cm、南北約20cmの規模で検出したが、端部が破壊されているため規模は不明である。

標高約12.9mで黒色の硬化面(11層)を検出した。11層は現代にかく乱を受けた調査区西側を除き、ほぼ全域から検出した。12層から掘り込まれている鑄鉄管を検出した。

11層下層に約6cmの砂利と石炭片からなる硬い層を確認した(12層)。12層の厚さは一定ではなく、下層の近世層が高いところでは薄く入るもしくは切れている。12層の上面は標高12.85~12.9mで平坦である。

12層を除去すると標高約12.8m地点で平坦な面を持つ16層を確認した。16層を掘り込むように土坑(SK5)、石組みの溝(SD7)、石列(SS8)といった遺構を検出した。また、16層との切り合い関係は分からないが、瓦だまり(SK4)も16層と同じ高さで検出した。

(2) 近代遺構

11層を境に現代遺物が出土しなくなることから、11層を近代遺構面と判断した。

12層から掘り込んだ調査区を南北に横断する鑄鉄管を検出した。鑄鉄管の直径は約5cmで、調査区13と調査区14で検出した金属製管とは異なり塗装されていない。鑄鉄管は座標上の北より8度東へ振った方向に延びている。

(3) 近世遺構

近代遺物を含んでいない16層を近世遺構面と推定した。16層を掘り込んで造られたSK4、SK5、SD7、SS8を近世遺構と考えた(詳細は第6章参照)。各遺構は切り合い関係整理すると、SK4とSK5は構築が新しく、SD7とSS8は構築が古い。

SK4

SK4は調査区南東で検出した方形の瓦溜りである。SK4は東西約50cm、南北約50cmの規模で、南及び東断面にかかっていないことから調査区内に収まる遺構であることがわかる。平面から隣接する遺構との切り合い関係が分かったため、SK4の掘削は行わなかった。そのため、遺構の深さは不明である。

SK4は15層、SS8、SD7を掘り込んでおり、調査区15の近世遺構の中では新しい遺構である。しかし構築時期を特定できる遺物は出土していない。また、SK4は最も新しい遺構であるにもかかわらず、ほかの遺構と比較して古い時期の遺物が出土している。出土遺物は天目茶碗片（図20 33）と瓦類で、明確に棧瓦と言える瓦は出土していない。

SK5

SK5は調査区西側で検出した不整形の土坑である。南北約1m、東西約1mの規模で検出した。埋土の掘削を行わなかったため、深さは不明である。西端はSK2に掘り込まれているため、正確な規模は不明である。東端でSD7掘方を掘り込んでいる。

土坑は黒褐色のやや粘質な土に瓦片、タタキ片、礫が多く入る。年代が明らかな遺物は出土しなかった。

SS8

SS8は16層を掘り込んで構築された長さ約180cm、幅約60cmの石列である。石列は調査区南端に位置しており東西方向に並んでいる。西端は調査区外へ、東端はSK4に削られている。ブロックが全く入らない黄色粘土（15層）の下から検出した。図15平面図で黄色粘土をグレートーンで示した。

SS8は数石の硬質砂岩からなる。掘削を終えた時点で3石を確認したが、15層下にさらに数石存在した。硬質砂岩の周囲には15層が密着していることから、15層はSS8を埋めるために入念に施工されたと考えられる。

15層はSS8の他に16層の上に載っていた。すなわちベースとなる16層を掘りこんでSS8を施工した後、15層によって埋められたと考えられる。出土遺物は軒丸瓦（図20 37）を含む瓦片のみである。

SD7（図16）

SD7調査区南東で検出した石組の溝である。長さ約200cm、幅約80cmの規模で、南北方向に延びている。溝の深さは約20cmで溝の底はやや締まった砂質土である。SD7を構成する石列の石材は硬質の砂岩である。石材はSS8とよく似ている。

SD7は16層を掘り込んで作られている。掘方は大部分がSK5によって破壊されているが、SD7の北西で確認することができた。掘方埋土はSK5に似た同じ黒褐色土であるが、より砂質でタタキが混じらない土である。瓦片や礫の含有量もSK5に比べて少ない。

SD7の内部には溝をふさぐように石があり、その石を境に北の埋土はブロックがほとんど入らない褐色砂質土、南は石灰や黄色及び黒色ブロックが混じる硬い灰褐色砂質土である。南側の埋土から瓦類、レンガ片、近代の染付が出土した。北側の埋土から遺物は出土していない。埋土内の近代遺物の存在から、近代までSD7が機能していたと断定できないが、近代まで地表に露出していたと判断できる。

SD7の南端は瓦溜りや近代の鋳鉄管、15層に破壊されているため明確ではない。15層がSD7を掘り込んでいるが、SS8と直接の切り合いがないため、SS8とSD7の新旧関係は不明である。

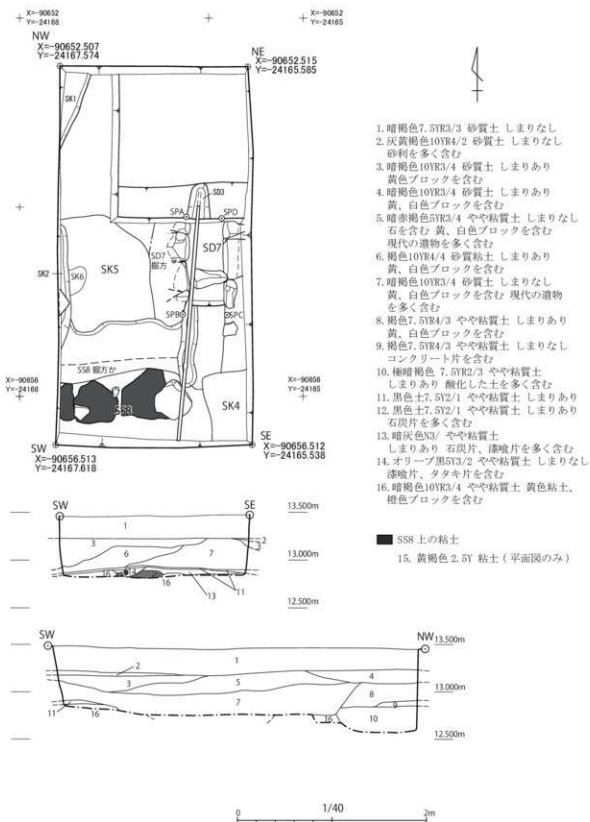


図15 調査区15 平面・断面図

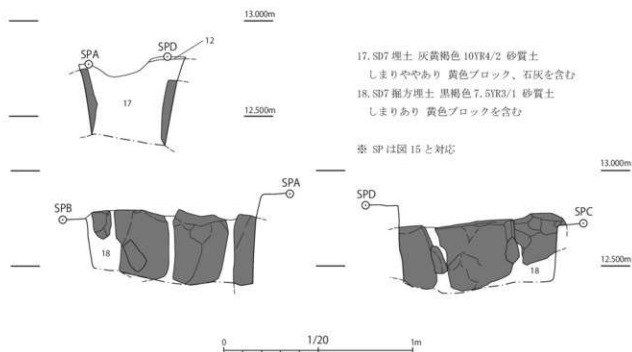


図16 SD7 立面・断面図

第3節 遺物

遺物の概要

本調査で出土した遺物の総数は953点で総重量は93,758gである。宝篋印塔基礎（図20 43）は重量を測ることができなかつたため総数及び総重量から除外した。

土器・陶磁器・炆器の点数は159点で全体の約17%である。重量は9,646gで全体の10%である。どの調査区でも出土点数の半分に満たない10～30%となっており、そのほとんどが碇子、タイル等の近代の遺物である。この様相は近世の最終面を検出した時点で掘削を終えるという発掘調査の方針を反映している。近世の遺物は碗類、蓋類、皿類、鉢類、その他（甕、水注類、鍋類）からなる。完形の遺物が1点も出土していないため、主に胎土と釉薬から判断したところ、近世の陶磁器はすべて瀬戸・美濃産、炆器は常滑産と考えられる。

瓦の点数は557点で全体の58%である。瓦は7点が近世、161点が近代で、残りの389点は小片のため判断できなかった。重量は46,498gで全体の50%である。瓦は全ての調査区で出土遺物点数の半数程度を瓦が占めている。重量比は各調査区で異なっている。二之丸北西部にある調査区11は25%、調査区12は34%である。逆にコンクリート片やレンガ塊といった土類が多く出土しており、土類が重量の半分以上を占めている。南部は瓦が重量の約半分を占め最大となった。この出土遺物の様相から現代かく乱が二之丸北西部に集中していることがわかる。

調査区11

調査区11の出土遺物は218点で重量は22882gである。遺物数の44%が瓦類であるが、重量でみると全体の38%をレンガやコンクリート等の土類が占める。この組成比は調査区11の北側が陸軍建物跡にあたり、陸軍建物に使用されていたと考えられるレンガ塊が多く出土したため、こういった重量構成になったと考えられる。

土器、陶磁器、妬器は64点出土し、重量は5,963gである。このうち時期が判別できた遺物は49点で、近世の遺物は20点、近代の遺物は29点である。

SK1から土器が2点、瓦が4点、金属製品が1点出土した。いずれも小片で時期の特定はできなかった。

SK2から出土した遺物は須恵器（図17 1）、山茶碗（図17 2、3）、そのほかに小片の土器片3点、陶器片2点、瓦片1点が出土した。土器片の内訳は土師皿が1点、鍋類が2点である。陶器片の内訳は灰釉の小皿が1点と灰釉の碗が1点である。瓦片は摩耗が激しく、器種の判断が困難であるが煙がかかっていることから少なくとも近世以降の瓦であることが分かった。いずれも亜円礫がまばらに敷かれた中に混ざるように出土した。また、SK2から上記の遺物の他に礫のサンプルを採取した。

コンクリート基礎Aの掘方から瀬戸美濃の灰釉陶器碗（図17 6）と近世の軒瓦（図17 7）が出土した。そのほかに瓦片8点と近代の金属製品8点が出土した。瓦片の時期は不明である。コンクリート基礎Aを構築する際に、その掘方に混ざり込んだ遺物と考えられる。

5層から出土した中世以前の遺物は山茶碗が1点、15層から山茶碗が1点、SK2から須恵器の甕が2点、山茶碗が3点である。その中から残存状態がよいSK2出土の須恵器甕1点（図17 1）、山茶碗2点（図17 2、3）の実測を行った。近世の遺物は土師皿片1点、陶器片4点、磁器片2点である。土器・陶磁器片は時期を特定できない細片であるが、いずれも瀬戸・美濃産と考えられる。陶器片に天目茶碗が1点含まれるが、胴部しか残存していないため、時期は不明である。近代の遺物は陶器の碗類、皿類、碗蓋と、磁器の碗類、皿類、碗蓋、磚子、タイルである。瓦は70点出土した。ほとんどが小片のため時期は不明である。このうち軒瓦は1点（図17 8）で近代の瓦と考えられる。道具瓦は3点（図17 10、11、12）で近代の瓦と考えられる。

15層から出土した中世以前の遺物は時期不明の山茶碗が1点である。近世の遺物は瀬戸・美濃産の小皿（図17 5）1点である。15層の掘削を行わなかったこともあり、これ以外の遺物は出土していない。

中世以前の遺物

1は須恵器の甕である。胴部しか出土していないため時期は不明である。

2は東濃型第3型式^{※1}と推定できる山茶碗の碗である。口縁部全体の1/9程度残存しており、高台は残存していない。口縁部は強く外反する。推定口径は11.5cmである。

3は東濃型10型式^{※1}と推定できる山茶碗の碗である。口縁部全体の1/10程度残存しており、高台は残存していない。口縁部は直線的に開き外反しない。推定口径は11cmである。

近世の遺物

5は14層から出土した瀬戸美濃の小皿である。大窩第4段階末^{※1}に属する。口縁部は残存していない。高台は削り出して作られており、逆三角形の高台断面をもつ。鉄軸が全体にかけている。内面と底に重ね焼きの痕跡が見られる。

7は唐草文様の瓦当を持ち、片端部が欠損しているが、向かって左側に小巴が接続していた痕跡を確認できるため、軒棧瓦に分類した。外区は丁寧にナデ調整されている。面取りは非常に浅い。文様区内は離れ砂が大量に付着している。凸面は小巴を接続した際に、接続面を強くナデ調整した痕跡が目立つ。

近代の遺物

出土した瓦の多くは小片で近世と近代の判別がつかないものも多いが、軒瓦の中で文様区が存在しない軒瓦を近代の陸軍建物に葺かれた瓦と考えている。

6はコンクリート基礎A掘方（6・7層）から出土した碗である。瀬戸・美濃産の灰釉碗で口縁部が残存していない。底部に墨書で「柴田」と書かれている。

9は1層から出土した軒棧瓦である。小巴のみ残存している。推定直径が9cmとなり軒丸瓦にしては小ぶりであるため、軒棧瓦の小巴とした。胎土はやや暗い灰白色である。煙がよく吸着しているため、表面には光沢がある。

8は5層から出土した軒平瓦もしくは軒棧瓦である。胎土は灰白色で1mm程度の砂粒が入る。全体に離れ砂のようなものが付着している。焼成、煙が9によく似ている。

10は5層から出土した道具瓦である。胎土や焼成具合は9によく似ているが、煙の吸着が比較的甘い。用途は不明である。胎土や焼成から近代と判断したが、近世までさかのぼる可能性も否定できない。

11は5層から出土した輪違瓦である。凹面に布目痕と吊り紐痕がよく残っている。端部に陰刻の菊文と陽刻の菊文の刻印が押されている。陽刻の菊文刻印は2/3が切れている。胎土は灰白色で班状に黒い粒が入っている。現代層から出土した瓦であるが、近世までさかのぼる可能性も否定できない。

12は5層から出土した鬼瓦である。胎土、焼成、煙が9によく似ている。割れ口からベースとなる瓦に支えとして直方体の粘土をいくつか張り付けて製作したことが分かる。文様区の大半が欠損しているため、文様は不明である。

調査区12

調査区12の出土遺物は156点で重量は24,510gである。瓦類が遺物の62%を占めているが、調査区11と同様に総重量の多くを土類がしめる。これらは近代に建てられた陸軍建物の部材と考えられる。土器、陶磁器、炆器は17点で重量は1,023gである。錠等の建物部材と考えられる金属製品も多く出土しており、レンガ片やコンクリート片と組み合わせるものと考えられる。近世遺構面を面的に確認できなかったこともあり、近世の遺物はほとんど出土しなかった。

遺物の大半は現代層である1層から8層で現代遺物と共伴して出土した。1層から山茶碗（図17 4）が出土した。4層からレンガ（図18 13、14）が出土した。5層から宝篋印塔の基礎（図20 43）が出土した。8層からレンガ（図18 15、16）が出土した。

中世以前の遺物

4は尾張型第7型式⁹³の山茶碗の皿である。高台はなく平底である。胎土は2や3と比べると粗く、長石が多く混ざっている。胴部の厚さは5mmと分厚い。また、口縁部も分厚く、直線的である。推定口径は8cmである。

43は宝篋印塔の基礎である。幅33cm、奥行33cm、高さ24cmである。高さ24cmのうち反花が8cmを

占める。反花は立体的で肉付きがよい。四面に格狭間が彫られている。格座間の内部に花卉型の除刻が存在する。面Aの除刻はほかの面に比べて風化が激しいため、面Aがほかの面より風雨に曝されやすいような配置であったと考えられる。宝篋印塔の石材は硬質の砂岩で、一部に石英のような白い鉱物が入っている。格座間の広さから15世紀代の宝篋印塔台座と考えられる。

近世の遺物

実測に耐えうる近世遺物は出土しなかった。主な出土遺物は瓦で、小片のため時期の特定ができなかった。

近代の遺物

レンガは大きさと色調から13と14、15、16に分けることができた。

13はレンガ同士を接続する漆喰等の接着剤が全く付着していないため、構造物として使用されていなかった可能性が高い。色調はにぶい赤橙色である。

14は13よりも一回り小さいレンガである。すべての面が丁寧にナデ調整されている。レンガ同士を接続する漆喰等の接着剤が全く付着していない。

15は13よりも一回り小さいレンガである。胎土が赤色で粗く、長石が多く含まれるレンガである。小口2面を除く全体に漆喰と思われる白色の接着剤が薄く付着している。調整は全体を丁寧にナデ調整している。

16は13よりも一回り小さいレンガである。胎土が赤色で粗く、長石が多く含まれるレンガである。小口1面を除く全体に白色の接着剤が分厚く付着している。表面の調整は接着剤が付着しているため不明である。

調査区13

調査区13の出土遺物は33点で重量は3,454gである。最も多く出土した遺物は瓦で21点、2234gである。土器、陶磁器、炆器は8点で重量は779gである。そのうち4点が近世の遺物である。調査区11と調査区12が位置する北西部と異なり、土類が1点も出土していない。実測した遺物を含む大半の遺物が現代層（1～10層）から出土している。

近世の遺物

17は調査区13の現代層から出土した瀬戸・美濃産の灯明皿である。大窯第4段階後半の灯明皿^{*1}である。内外面に炭化物が付着していることから実際に灯明皿として使用していたと考えられる。

18は調査区13の現代層から出土した瀬戸・美濃産の大鉢である。いわゆる笠原鉢である。口縁部の一部が残存している。全体を灰釉で施釉し、内面に鉄軸で文様を描いている。残存部分が少ないため図柄は不明である。釉は劣化しており、白色に変色している。登窯の第1段階第2小期に属すると推定できる^{*1}。

19は調査区13の8層から出土した瀬戸・美濃産の大皿の底部である。内面は薄く灰釉が施釉され、目跡が一面のみみられる。外面は無釉で幅広の高台を有し、高台内には判読不明の墨書がみられる。時期は登窯第3段階と考えられる^{*1}。

20は調査区13の現代層から出土した播鉢である。胴部の一部と底部が残存している。全体に鉄釉が施釉されているが、外面と底部は軽く施釉された程度であるため所々で露胎が見られる。底部に糸切痕がみら

れる。底部外縁と内面に摩滅が見られる。内面の刷目は16本で1単位となる。

21は調査区13の現代層から出土した軒丸瓦である。瓦当、丸瓦部ともに欠損が多い。瓦当は珠文が1つと巴の尾が残るのみである。凹面は瓦当と丸瓦部を接続した際の横ナデが残っている。

近代の遺物

30は調査区13の近代整地層（13層）から出土した洋風の瓦である。全面に濃暗茶色のマンガン釉が施され、胎土は小石混じり橙色を呈する。近代に製造された瓦であると考えられる。

32は調査区13の管理土（3層）から出土した一銭硬貨である。両面とも腐食が著しく、鑄造年は不明である。

調査区14

調査区14の出土遺物は179点で重量は13,196gである。最も多く出土した遺物は瓦で119点、9,072gである。土器、陶磁器、炆器は24点で重量は528gである。遺物は主に現代の管掘方（2、3、4層）と現代層（1、5、6、7、8層）、近現代層（10層）から出土した。また、北東と南西のサブトレンチから陶磁器と瓦の小片が出土したが、近代の遺物と共伴している。

現代の管掘方から陶磁器14点、瓦類24点、土類4点、その他金属製品など5点が出土した。その中から近世の軒丸瓦（図19-22）、近代の染付碗（図19-25）、近代の道具瓦（図19-28）を抽出し、実測した。

その他に現代層から施釉丸瓦（図19-23）、近代の棧瓦（図19-27）、レンガ（図19-31）を抽出した。近現代層から土瓶蓋（図19-24）、南東サブトレンチから染付碗（図19-26）を抽出した。

近世の遺物

22は軒丸瓦である。文様区の中には大きな珠文が近接して4つ確認できる。円弧から推定した瓦当の直径は12cmである。

23施釉丸瓦である。厚さは2cmで、残存幅は8cmである。円弧から推定した幅は17cmである。外面にいわゆる「織部釉」と呼ばれる深緑色の銅緑釉が施釉される。内面は無釉である。外面は施釉されているため確認が難しいがヘラケズリ、内面はナデによって調整されている。胎土は灰白色で緻密である。銅緑施釉瓦は二之丸庭園周辺でよく出土する遺物であるが、向屋敷以南（巻頭5参照）ではこれが唯一の事例である。

近代の遺物

24は花崗岩製切石直上から出土した瀬戸・美濃産の土瓶の蓋である。外面全体に鉄釉を施釉した上で外面中心部に青白い釉を施釉している。内面は無釉でかえしがつく。

25は手書きで草花文が鮮やかな酸化コバルト釉で描かれた瀬戸・美濃産の染付中碗である。明治前半の碗で、大阪鎮台から同様の碗が出土している⁸³。

26は外面にコバルト釉でよろけ縞文様が描かれた瀬戸・美濃産の染付中碗である。明治10～20年代の染付碗で吉田城から同様の碗が出土している⁸³。

27棧瓦である。裏面に滑り止めのための横方向の条線がみられる。

28は道具瓦である。角隅に固定のための穿孔が1つみられる。なまこ壁のように壁に貼り付ける瓦と考えられる。兵舎の壁に使用された可能性がある。

31はレンガである。全体の1/3ほどが残存し、小口の一面以外にはモルタルが付着する。露出している平の一面には板ナデの痕跡がみられる。

調査区15

調査区15から出土した遺物は304点で総重量は21189gである。最も多く出土した遺物は瓦類で全体の62%にあたる210点が出土している。重量に換算すると全体の81%にあたる。土器、陶磁器、炆器は46点出土し、重量は1353gである。このうち大まかな時期が特定できた遺物は34点で、近世の遺物は12点、近代の遺物は22点である。

11層と12層から陶磁器や瓦片が多数出土している。ほとんどが近代の遺物であるが2点の近世遺物を確認した。16層からは遺物が出土していないが、SK4、SD7、SS8の埋土から近世の陶磁器の碗皿や瓦片等が出土した。

SD7から出土した遺物は陶器の甕胴部1点、磁器1点（図20 40）、瓦類18点、土製のレンガ1点である。瓦類は丸瓦が4点、平もしくは棧瓦が14点である。

SS8から出土した遺物は軒丸瓦（図20 37）、丸瓦、平もしくは棧瓦の3点である。

SK4から出土した遺物は陶器（図20 33）と瓦類が21点である。瓦類は軒平もしくは軒棧瓦（図20 36）が1点、丸瓦が5点、平もしくは棧瓦が14点、道具瓦の輪違瓦（図20 42）が1点である。

1層から道具瓦（図20 39）を抽出した。

12層から出土した遺物は陶器6点、磁器4点、炆器6点、瓦類40点、土類6点、金属製品他15点である。近世の遺物は陶器の皿類2点（図20 34、35）である。この皿2点と軒丸瓦（図20 38）、軒平瓦（図20 41）を抽出した。

中世以前の遺物

33は陶器の中碗である。形状は天目茶碗である。黒色の鉄釉がかけられているが、下部は変色してやや青みがかった白色となっている。胎土から瀬戸・美濃産と考えられる。SK4から出土した遺物は33以外全て瓦類である。

近世遺物

34は瀬戸・美濃産の灯明皿である。鉄釉が薄くかけられている。口縁の一部のみ残存している。

35は瀬戸・美濃産の灰釉の小皿である。口縁の一部のみ残存している。推定径は11cmである。

36は軒平もしくは棧瓦の瓦当である。顎と平瓦部に接続するために補充された粘土部分のみ残る。文様区や平瓦部が欠損しているため、年代や形式は不明である。顎貼り付けに伴うキザミは見られない。残存厚は2.5cmである。顎の厚さは1cmである。

37は巴文軒丸瓦である。瓦当の大部分が欠損しており、文様は珠文が1つのみ残る。凸面は縦方向にケズリ調整がなされている。瓦当は薄く面取りされている。瓦当は外区、文様区ともにわずかに離れ砂が付着している。凹面は布目痕が観察できる。

38は巴文軒丸瓦である。瓦当の下部のみが残る。37とは珠文の大きさと厚みが異なるため別個体である。瓦当は薄く面取りされている。外区は不定方向に削られている。一部の巴がつぶれていることから范の押し方は雑といえる。文様区に離れ砂が付着している。

39は道具瓦片である。用途は不明である。釉薬や焼はかかっていない。胎土は赤褐色で、瀬戸美濃陶器の胎土によく似ている。線刻が5本刻まれている。線刻は卸皿のように深く、また2方向の線刻が垂直に交わっている。線刻は焼成前に刻まれている。胎土から釉が剥落した施釉の道具瓦である可能性が考えられる。

42は道具瓦の輪違瓦である。裏面に布目痕が残る。

近代遺物

40は瀬戸・美濃産の染付の中碗である。酸化コバルト釉を用いて草花文が手書きで描かれている。推定径は11cmである。明治前半の碗で、大阪鎮台から同様の碗が出土している^{*4}。

41は無文の軒平瓦である。瓦当下部が直線的である。全体を調整痕がなくなるまで丁寧な磨いている。これらの特徴は近代に陸軍が使用する軒瓦によく見られるため、この瓦も陸軍建物に葺かれていたと考えられる。

*1 藤澤良祐2008「第1章 総論」「編年表」「愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系」愛知県

*2 岡田幸子・小林一郎・増山晃太・田中尚人2006「軌道用敷石の規格と産地に関する研究」『土木学会論集D2（土木史）』Vol.72, No.1

*3 岡本直久・河合君近2021「文明開化とせとやき—近代前期の瀬戸窯と美濃窯—」公益財団法人瀬戸市文化振興財団

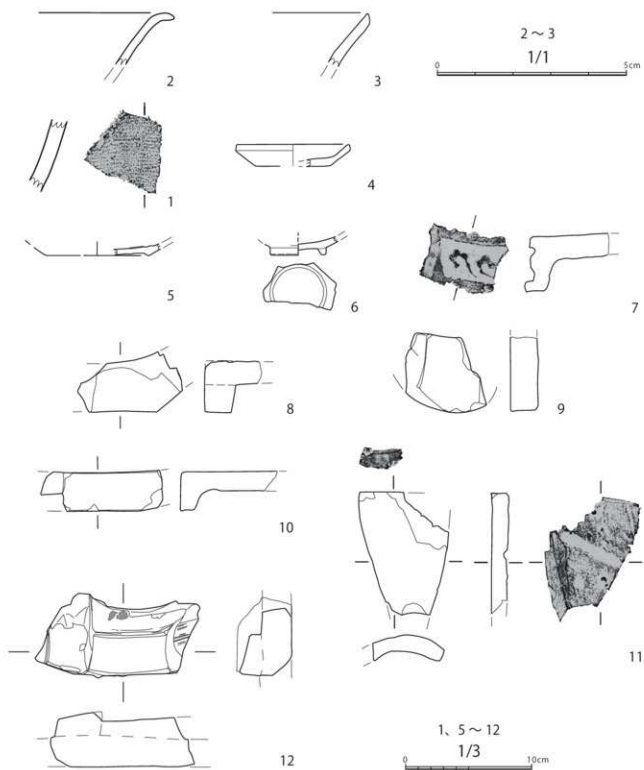
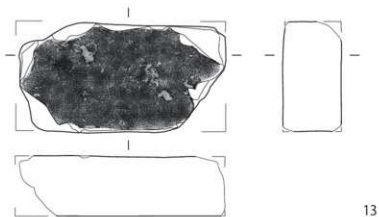
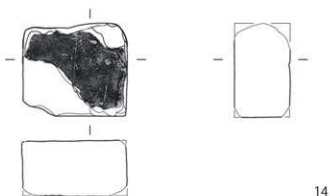


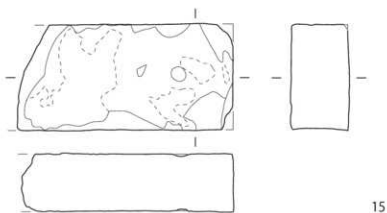
图17 出土遺物1~12



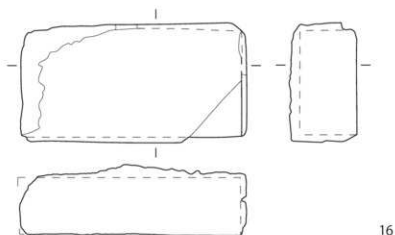
13



14



15



16



图18 出土遺物13~16

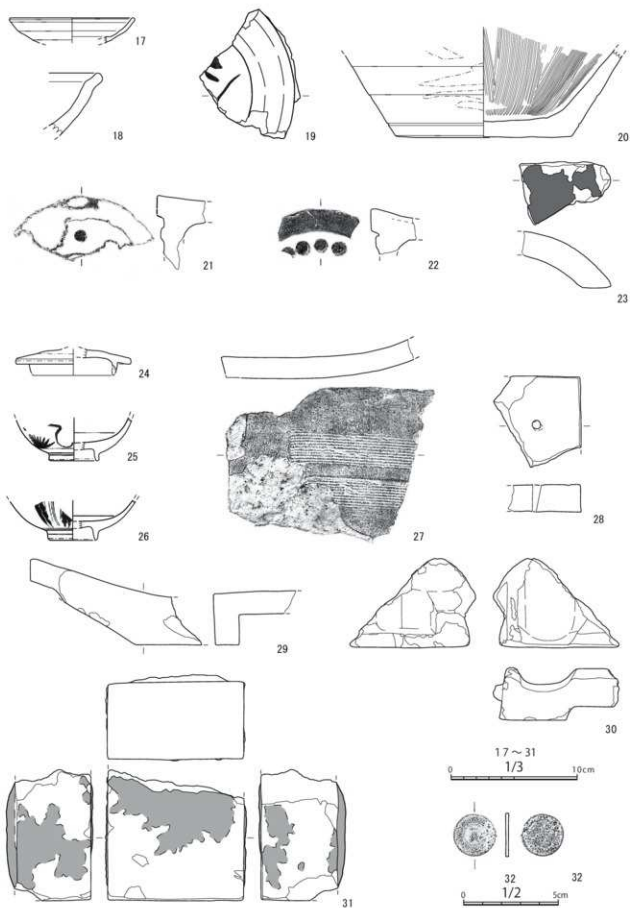


图19 17~32

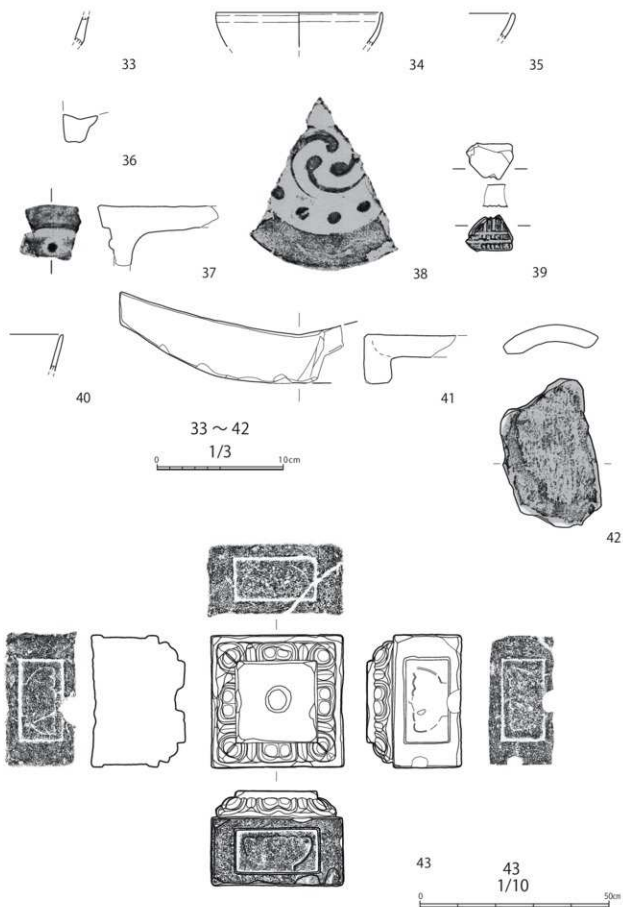


図20 出土遺物33~42

表4 陶磁器観察表

※No.は図版番号及び巻末写真番号と対応

NO.	検出地点	材質	器種	法量 (cm) ※			重量 (g)	成形・調整	装飾				製作		備考
				a	b	c			絵付・釉薬	文様	胎土色 胎質	印・銘 など	製作地	製作年代	
1	調査区11 SK2	須恵器	甕	(2)	(5.5)		59	タタキ肌	自然釉	—	灰	—	—	中世以前	タタキ肌あり
2	調査区11 SK2	山茶碗	山茶碗	(1.5)	(1.3)		2	ロクロ	自然釉	—	灰	—	東濃	中世以前	第3型式
3	調査区11 SK2	山茶碗	山茶碗	(1.1)	(1.5)		1	ロクロ	—	—	灰	—	東濃	中世以前	第10型式
4	調査区12 1層	山茶碗	山茶碗	8.8	1.7		12	ロクロ	—	—	灰	—	尾張	中世以前	第7型式
5	調査区11 15層	陶器	小皿	(10)	(0.8)		9	ロクロ	鉄釉	—	黄褐	—	瀬戸・美濃	近世	大塚4段階末
6	調査区11 6・7層	陶器	中碗	(3.3)	(1.4)		22	ロクロ	灰釉	—	灰白	墨書「榮田」	瀬戸・美濃	近代	重ね焼き肌あり
13	調査区12 4層	土類	レンガ	12.7	(22)	6.5	1932	板ナデ	—	—	淡橙	—	—	近代	
14	調査区12 4層	土類	レンガ	11	(9.9)	6	811	—	—	—	明赤褐	—	—	近代	
15	調査区12 8層	土類	レンガ	11	22.4	6	2630	板ナデ	—	—	明赤褐	—	—	近代	漆喰付着
16	調査区12 8層	土類	レンガ	10.5	23	6	3190	—	—	—	明赤褐	—	—	近代	漆喰付着
17	調査区13 現代層	陶器	灯明皿	10	2		8	ロクロ	—	—	褐灰	—	瀬戸・美濃	中世以前	
18	調査区13 現代層	陶器	大鉢	(4.4)	(5)		74	ロクロ	灰釉・鉄釉	—	浅黄橙	—	瀬戸・美濃	近世	登壇第1段階 笠原鉢
19	調査区13 8層	陶器	大皿	(1.1)	(1.5)		159	ロクロ	灰釉	—	黄褐	墨書	瀬戸・美濃	近世	登壇第3段階
20	調査区13 現代層	陶器	楕鉢	(6.9)	(2.4)		306	—	鉄釉	—	浅黄橙	—	瀬戸・美濃	近世	登壇第2段階
24	調査区14 10層	陶器	土敷蓋	(3.8)	(1.4)		15	—	うのふ釉	—	灰白	—	瀬戸・美濃	近代	
25	調査区14 3,4層	磁器 (染付)	中碗	(4.2)	(3.4)		26	ロクロ	コバルト釉	草花文	灰白	—	瀬戸・美濃	近代	
26	調査区14 南東深淵	磁器 (染付)	中碗	(4.4)	(3.1)		13	ロクロ	コバルト釉	草花文	灰白	—	瀬戸・美濃	近代	
31	調査区14 10層	土類	レンガ	(10.1)	10.8	5.9	1030	—	—	—	明赤褐	—	—	近代	漆喰付着
32	調査区13 3層	金属製品	硬貨	2	1		3	—	—	—	—	「一銭」	—	近代	
33	調査区15 SK4	陶器	碗類	—	(2.0)		5	ロクロ	鉄釉・白泥釉	—	黄褐	—	瀬戸・美濃	近世以前か	天目茶碗
34	調査区15 12層	陶器	灯明皿	(1.3)	(3.0)		3	ロクロ	鉄釉	—	灰黄褐	—	瀬戸・美濃	近世	
35	調査区15 12層	陶器	皿類	(1.2)	(2.0)		5	ロクロ	灰釉	—	にぶい黄橙	—	瀬戸・美濃	近世	

NO.	検出地点	材質	器種	法量 (cm) 容			重量 (g)	成形・調整	裝飾			製作		備考	
				a	b	c			絵付・軸差	文様	胎土色 胎質	印・款 など	製作地		製作年代
40	調査区15 SD7	磁器 (染付)	中国	(0.3)	(3.3)		10	ロクロ	コバルト軸	草花文	灰白	—	瀬戸・美濃	近代	

表5 瓦類観察表

※No.は図版番号及び巻末写真番号と対応

NO.	検出地点	種別	法量 (mm)			重量 (g)	文様	表面色 胎土色	印・款 など	製作		備考
			a	b	c					製作地	製作年代	
7	調査区11 67層	軒椼瓦	—	(4.5)	(7.0)	136	唐草文	暗灰 灰白	—	東海	近世	
8	調査区11 5層	軒平・椼瓦	—	(4.6)	(8.1)	136	無文	暗灰 灰白	—	東海	近代	
9	調査区11 表土	軒椼瓦	(5.9)	—	—	99	無文	暗灰 灰白	—	東海	近代	
10	調査区11 5層	道具瓦	高さ 3.4	幅 (8.0)	奥行 (7.9)	173	—	暗灰 灰白	—	東海		
11	調査区11 5層	輪漣瓦	高さ 2.6	幅 (7.7)	奥行 (9.5)	111	—	暗灰 灰白	側面に「*」文	東海		凹面に布目痕、釣り 跡痕
12	調査区11 5層	鬼瓦	高さ (6.5)	幅 (12.1)	厚さ 3.2	306	不明	暗灰 灰白	—	東海	近代	
21	調査区13 現代層	軒丸瓦	(5.1)	—	(4.6)	149	巴文	暗灰 灰白	—	東海	近世	
22	調査区14 3.4層	軒丸瓦	(4.6)	—	(4.2)	81	巴文	暗灰 灰白	—	東海	近世	
23	調査区14 8層	丸瓦	—	—	(4.7)	88	—	濃緑色 (施 軸) 灰白色	—	東海	近世	銅線軸を施軸 凹面に横ナデ
27	調査区14 10層	平・椼瓦	高さ (1.9)	幅 (15.1)	奥行 (12.0)	380	—	暗灰 灰白	—	東海	近代	凸面に織割あり
28	調査区14 3.4層	平・椼瓦	高さ2.1	幅 (6.9)	奥行 (5.2)	125	—	暗灰 灰白	—	東海	近代	
29	調査区13 1層	軒瓦	—	7.6	(11.4)	257	無文	暗灰 灰白	—	東海	近代	軒平瓦もしくは軒椼 瓦 除軍使用瓦か
30	調査区13 13層	洋瓦	高さ (3.7)	幅 (9.0)	奥行 (6.2)	166	—	暗灰 明赤褐	—	東海	近代	
36	調査区15 SK4	軒平・椼 瓦	—	(2.1)	(5.1)	25	不明	暗灰 灰白	—	東海	近世	
37	調査区15 S58	丸瓦	(6.5)	—	(9.2)	182	巴文	暗灰 灰白	—	東海	近世	
38	調査区15 12層	丸瓦	(13.2)	—	—	229	巴文	暗灰 灰白	—	東海	近世	
39	調査区15 表土	道具瓦	高さ 1.9	幅 (3.7)	奥行 (2.7)	18	—	暗灰 灰白	—	東海		施軸瓦か 鈔瓦のような刻みあり

NO.	検出地点	種別	法量 (mm)			重量 (g)	文様	表面色 胎土色	印・銘 など	製作		備考
			a	b	c					製作地	制作年代	
41	調査区15 12層	軒平瓦	—	67	155	700	無文	暗灰 灰白	—	東海	近代	
42	調査区15 SK4	輪縁瓦	高さ 24	幅 (80)	奥行 (115)	147	—	暗灰 灰白	—	東海		凹面に布目痕

第4章 資料調査成果

はじめに

名古屋城二之丸のうち、庭園では文化文政期の二之丸庭園の遺構を確認するため、特別史跡未告示地区では近世遺構の残存状況を確認するため、継続的に発掘調査が行われている。発掘調査に際して、予期せぬ近代遺構の検出によって本来の目的である近世遺構の確認に至らないケースがある。近代遺構は終戦後も残存しており、建物配置図等の資料も多く残されている。しかし十分に整理されないまま発掘調査が先行して行われてきた。そこで、本章では発掘調査成果及び、2021年に行った『歩兵第六聯隊平面図集』に収録されている「名古屋城二之丸平面図 歩兵第六聯隊」の調査成果から近代名古屋城二之丸の平面的な復元を試みる。

近代二之丸の概要

名古屋城は明治時代に入ると徳川家から政府に所有が変わった。二之丸は1873年（明治6）に陸軍省所管⁹¹となった。兵舎は1874年（明治7）に二之丸の南側に建設された。1876年（明治9）二之丸北東に第五六中隊兵舎と第七中隊第二機関銃隊兵舎（図21）、1917年（大正6）二之丸東に歩兵砲隊兵舎（図21）、1940年（昭和15）二之丸北西に兵舎及び講堂（図21）が増設され図21のような姿となった。少なくとも1876年には二之丸庭園は整地され兵舎が建てられるが、北西の一角は兵舎の庭園として残され、改修が行われた。また、二之丸東一之門石垣は1917年の兵舎増設時に一部が取り外され、石は兵舎の基礎として再利用された⁹²。兵舎は1945年（昭和20）に陸軍省の手を離れる。

1945年以降、二之丸は大蔵省の所有となる。二之丸は空襲をほとんど受けなかったことから1948年（昭和23）以降、名古屋大学が兵舎をキャンパスとして再利用した。具体的には文学部・法経学部への転用が1947年（昭和22）11月14日に決定し、1948年に大学本部、文学部、法学部が二之丸へ移転してきた。その後、附属図書館や教育学部も二之丸へ入り、キャンパスとしての陣容を整えていった。1948年2月19日に提示された「新制名古屋大学の構想」によると、キャンパスとして使用されていない兵舎を学生宿舎として利用する構想があった。実際に二之丸北東の兵舎2棟は学生会館として名古屋大学をはじめ、県内の大学生が学生寮として使用した。

1964年（昭和39）に名古屋大学が城外へ移転すると学生会館を除いた兵舎は順次取り壊された。兵舎の一部は移築され、博物館 明治村や橋本電機工業株式会社に移築された。跡地は愛知県体育館と公園となり、現在に至る。また、学生会館は1973年（昭和48）と1974年（昭和49）に不審火によって焼失し、跡地は公園となっている。

『歩兵第六聯隊平面図集』について（図21）

『歩兵第六聯隊平面図集』は博物館 明治村が所蔵する兵舎配置図及び建物平面図集である。この図面は兵舎を博物館 明治村に移築する際に東海財務局から譲り受けたものであるが、東海財務局以前の所有者及び制作年は不明である。

博物館 明治村の許可を得て2020年度から2021年度にかけて『歩兵第六聯隊平面図集』の写真撮影と一

部デジタルトレースを行った。デジタルトレースを行った図面は図面集内の「名古屋城二之丸平面図 歩兵第六聯隊」(図21、巻頭6)、「第五・第六中隊兵舎」、「第七中隊第二MG兵舎」、「歩兵砲隊兵舎 階上」、「歩兵砲隊兵舎 階下」、「通信隊兵舎及講堂 階上 階下」の6点である。近代二之丸の建物配置を把握するために「名古屋城二之丸平面図 歩兵第六聯隊」のデジタルトレースを行った。それ以外は2021年以前の発掘調査で出土した兵舎を抽出してデジタルトレースを行った。

「歩兵第六聯隊平面図集」は1ページ目に「名古屋城二之丸平面図 歩兵第六聯隊」という題の平面図があり、次ページ以降は建物平面図で、建物の詳細な寸法や柱や扉の位置が次ページ以降に描かれている。建物平面図の縮尺は1/100である。

「名古屋城二之丸平面図 歩兵第六聯隊」は兵舎、上下水道、生垣、物干の配置が描かれた配置図である。各構造物の配置は後述する他資料との比較や発掘調査成果から比較することができた。縮尺は1/600である。二之丸の輪郭は北東の欠け等の実際には存在しない出隅と入隅が描かれている。また、図面上の石垣天端の長さや実際の石垣天端の長さが10m程度の差があることから精密な実測図ではないと考えられる。計測は実際の石垣と図上の石垣の形状が一致している箇所で行い、実際には存在しない入隅と出隅が描かれている箇所では行わなかった。実際の石垣天端長と図上の石垣天端長の差は表6にまとめた。建物間の距離や建物の軸方向については、建物が二之丸に現存していないことから検証することができなかった。

上記のように兵舎、上下水道、生垣、物干が細かく描かれているものの、二之丸輪郭や二之丸縁辺の長さが正確に描かれていないことが分かった。このことからあくまで建物や上下水道の位置関係を把握するための図面で、兵舎を維持管理するために使われていたと考えられる。

「名古屋城二之丸平面図 歩兵第六聯隊」に描かれたすべての建物に番号が振られている。また、一部に名称が記されているが、図面が劣化しており判断が難しい文字があった。読み取ることができた文字についてはトレース時にデジタル文字に置き換え、読みとることができなかった文字は■と表記した。

他資料との比較

二之丸に駐屯していた歩兵第六連隊OBが戦後に作成した図(図22)、アメリカ軍が撮影した航空写真(図23)、「史蹟名古屋城域平面図」(図24)、名古屋市が作成した都市計画基本図(図25)を使用して比較を行った。

図22は「歩兵第六聯隊歴史」に収録されている建物配置図である。「歩兵第六聯隊歴史」は戦後、歩兵第六連隊のOBが歩兵第六連隊に関する記録を収集し、まとめた本である。「歩兵第六聯隊配置図」は戦前の二之丸の様子を説明するために付けられた図面で、備考に「本図は昭和16年頃の配置とす」と書かれている。本図はキャプションによって各建物がどのような使われ方をしていたか、どのような組織が入っていたかを確認することができる。一方で二之丸の輪郭はデフォルメされており、縮尺も不明である。このことからあくまで建物の位置関係を把握するための図面と考えられる。

表6 「名古屋城二之丸平面図歩兵第六聯隊」長さの比較

	実際の天端長(m)	図上の天端長(m)
A	66.81	73.2
B	58.43	54
C	108.07	99
D	10.97	8.4
E	115.07	72
F	74.9	63
G	10.7	6
H	67.85	57
I	166.62	151.2
J	11.57	12
K	149.28	132

図23はアメリカ軍が1945年（昭和20）6月9日に撮影した航空写真である。画像の解像度が粗いため、主要な建物以外を観察することが難しい。

図24は1950年（昭和25）ごろの作成と推定されている地図である。1/3000の実測図である。図23と比較して形状と面積が正確に描かれている。本丸に焼失した本丸御殿が描かれているため、1945年以前に作成された図面に加筆している可能性がある。

図25は1955年（昭和30）に作成された都市計画基本図である。都市計画基本図は5年ごと航空写真をもとに名古屋市が作成している。地図では二之丸一帯は名古屋大学と書かれており建物が立ち並んでいる。図24と比較して小規模な建造物が多く描かれている。

上記の資料の他に1921年（大正10）に作成された「名古屋離宮平面図」（宮内庁宮内公文書館蔵）、1945年の名古屋城の様子を描いた図（北川組蔵 制作年不明）を参照した。

「名古屋城二之丸平面図 歩兵第六聯隊」と他資料を比較すると大規模な建物（図22にある1、2、3、5、6、7、9、10、11、1MG、2MG、3MG、本部、厩、将校集会所、倉庫）の配置状況は一致する。差異があるのは南東の厩と南西の倉庫である。

厩は図21の「厩舎」と書かれた建物とその南に「鞍置場」と書かれた建物と接続している建物の2棟である。図22では「厩」と書かれた建物が南北に2棟並んでいる。図24と図25では南北に長い1棟に置き換わっている。図23は不鮮明な写真のため、判然としないが、南北に長い1棟に見える。

倉庫は図21の「第一倉庫」と書かれた建物とその南の「営倉冬暖庫」³³と書かれた建物である。図22では「戦用品倉庫」と書かれた建物が南北に2棟並んでいる。図23では南北に長い1棟の建物が写っている。図24も南北に長い1棟の建物が描かれている。図25は南北に2棟並んだ建物がびったりとくっついている。

以上のように大規模な建物で若干の齟齬が見られる。各国の製作年代が異なるため、増改築された可能性が考えられる。もしくは各国の役割が異なり、重点を置くところも異なっていたことが図の差につながった可能性も考えられる。

小規模な建物まで描いているのは図21と図22のみである。図23で不鮮明ではあるが、確認することができる。図24、図25では描かれておらず、戦後に取り壊されたか省略されていると思われる。図21と図22を比較すると小規模な建物の数が大きく異なっていた。例えば庭園より北にある二之丸北端の建物群が図21では「演武場」、名称不明、名称不明、「弾薬充填所」、「倉庫」の5棟に対して図22では「剣道場」と「弾薬分配所」の2棟となっている。「演武場」を「剣道場」、「弾薬充填所」を「弾薬分配所」に比定することができるが、残りの3棟は図22に描かれていない。図22は「昭和16年頃」から時間が経ってから作成されたため、筆者の記憶から規模の小さい建物が抜け落ちていた可能性がある。

まとめ

今回史料調査を行った「歩兵第六聯隊平面図集」の中でも特に「名古屋城二之丸平面図 歩兵第六聯隊」を他資料と比較した。小規模な建物の差異はあるが、大規模な建物はほとんど差異がなく、「名古屋城二之丸平面図 歩兵第六聯隊」は非常に精度の高い建物配置図であることが分かった。

配管については二之丸庭園第2次・第3次調査で「名古屋城二之丸平面図 歩兵第六聯隊」の通りに建物から数m離れた地点で建物平行な管を検出した³³。

また、今回の発掘調査成果では位置関係から調査区11のコンクリート基礎Aが「兵舎及び講堂」に調査区15の管が「第十一中隊兵舎」から南西へ延びて「銃工場」へ向かう「水道」に比定できた。今後の発掘調査でも調査区の設定や出土した近代遺構の特定に活かすことができる。

※1 「歩兵第六聯隊歴史」に第六連隊の前身である東京鎮台第三分営が「名古屋城の田尾張郡に駐屯し」とあることから名古屋城には兵舎建築以前から陸軍が入っていたことがわかる。

※2 石垣の取り外しは陸軍兵士によって行われた。取り外した隅角石には「表面には工事を担当した番士の氏名を刻印してその責任を明かにし、…（中略）…その内部は更大なる石材にてその間隙には大小の石塊を固く填実せられ」（『歩兵第六聯隊歴史』）とあり、刻字と築石が存在していたことが分かる。

当該の石ではないが、発掘調査において近代以降の層から石垣の築石と思われる石材が出土している（写真）。ただし兵舎との関係は不明である。

※3 名古屋市2017『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書—第1次（2013）～第3次（2015）—』

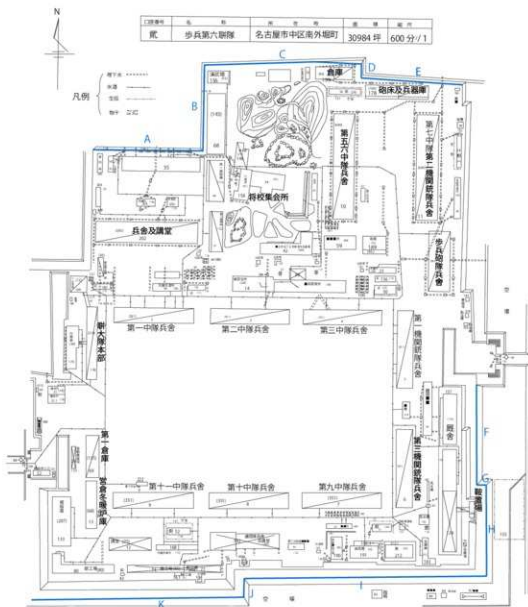


図 21 「名古屋城二之丸平面图 歩兵第六聯隊」デジタルトレース

※1/2400(原図をデジタルトレースした上で1/4に縮小した)

※文中で取り上げた兵舎は文字を拡大して強調した

— 石垣天端長計測箇所

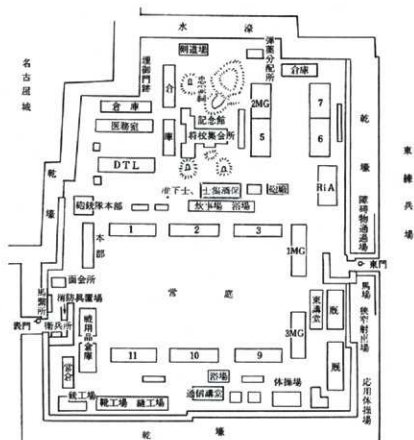


図22 「歩兵第六聯隊配置図」
「歩兵第六聯隊歴史」より引用



図23 アメリカ軍撮影航空写真（国土地理院蔵）



圖24 「史蹟名古屋城城平面圖」(名古屋城総合事務所蔵)
二之丸付近を拡大

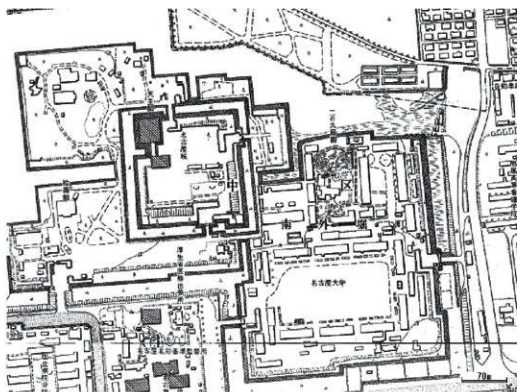


圖25 1955年都市計画基本圖

第5章 自然科学分析

森 将志・石川 智・バンダリ スタルシャン (株式会社 バレオ・ラボ)

1. はじめに

名古屋城二之丸では、圍池と考えられる場所から堆積物が検出された。この堆積物の性質を検討するために、花粉分析とプラント・オパール分析、珪藻分析、大型植物遺体分析を行った。

2. 試料

圍池と考えられている場所から、SK2が検出された。SK2には、酸化したと考えられる褐色の層に挟まれて、褐色(10YR4/1)シルトが堆積していた。この褐色10YR4/1(シルト)が分析試料である。

3. 方法と結果

3-1. 花粉分析

試料(湿重量約3g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混液を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。この残渣よりプレパラートを作製し、プレパラート1枚の全面を検鏡した。また、保存状態の良好な分類群の単体標本(PLC.3736、3737)を作製し、写真を図版1に載せた。

検鏡の結果、試料には十分な量の花粉化石が含まれていなかった。検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉1、草本花粉3、シダ植物胞子1の、総計5である。これらの花粉・胞子の一覧表を表1に示した。なお、十分な量の花粉化石が得られなかったため、花粉分布図は示していない。

表7 SK2の産出花粉胞子一覧表

学名	和名	
樹木		
<i>Pinus</i> (unknown)	マツ属(不明)	2
草本		
Gramineae	イネ科	11
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科・ヒユ科	2
シダ植物		
<i>Salvinia</i>	サンショウウオ属	1
Arboreal pollen	樹木花粉	2
Nonarboreal pollen	草本花粉	14
Spores	シダ植物胞子	1
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	17

3-2. プラント・オパール分析

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約0.04mm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いてプレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、図版2に載せた。

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(表2)、分布図に示した(図1)。

検鏡した結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、シバ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の6種類の産出が確認できた。また、イネの初殻に形成される珪酸体(イネ額破片)も産出した。



図26 植物珪酸体分布図

表8 SK2の試料1g当りのプラント・オパール個数

イネ (個/g)	イネ額破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
38,400	8,500	41,600	1,100	3,200	19,200	3,200	13,900

3-3. 珪藻分析

乾燥させた試料0.42gをビーカーに移し、30%過酸化水素水を加えて加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。反応終了後、水を加え、1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てた。遠心管に回収した懸濁残渣をシリンジで適量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを作製した。

プレパラートの予備的な観察を行ったところ、珪藻殻が希薄であったため、一定範囲内で検出した珪藻殻と破片を写真撮影し、同定・計数を行った。希釈率と検鏡面積から、試料の乾燥重量1gあたりの珪藻殻数(破片を含む)を求めた。

写真の同定・計数の結果、38個の破片を含め、計74個の珪藻殻を検出した。乾燥重量1gあたりの破片を含む珪藻殻数は、 9×10^5 個と見積もられた。撮影した写真の一部を図版3に掲出した。8属6種9分類群に同定された計数結果と、産出した珪藻の特徴を表3にまとめた。珪藻の特徴は、渡辺ほか(2005)と小杉(1988)および安藤(1990)が設定し、千葉・澤井(2014)により再検討された環境指標種群(表4)に基づく。

1殻を検出した*Eumotia naegeli*は高層湿原指標種(P)で、有機汚濁に関しては好清水性種、pHに関しては真酸性種とされる。陸生A群(Qa)の珪藻は4種が検出された。有機汚濁に関しては好清水性種、pH

表9 SK2の堆積物中の珪藻化石産出表

(種群は千葉・澤井(2014)、有機汚濁とpHは渡辺ほか(2005)による)

分類群	種	有機汚濁	pH
1	<i>Eumotia naegeli</i>	P	1 好清水性 真酸性
2	<i>Diadema contenta</i> f. <i>biceps</i>	Qa	8 好清水性 好アルカリ性
3	<i>Littocella mutica</i>	Qa	9 好汚濁性 好アルカリ性
4	<i>Pinnularia borealis</i>	Qa	1 広適応性 好酸性
5	<i>Hantzschia amphioxys</i>	Qa	8 広適応性 中性
6	<i>Aulacoseira alpigena</i>	U5	6 広適応性
7	<i>Navicula</i> spp.	U5	23
8	<i>Nitzschia</i> spp.	U5	16
9	<i>Pinnularia</i> spp.	U5	2
1	高層湿原	P	1
2	陸生A群	Qa	26
3	淡水不安・不明種	U5	47
1	海生種		0
2	汽水生種		0
3	淡水生種		74
4	その他不明		0
	合計		74
	堆積物1g中の殻数(個)		9.5×10^5

表10 環境指標種群と本分析で産出した種

種群名(以下、「指標種群」を称す)	環境指標となる現生種の出現環境(水生/陸生/両生)	本分析で産出した種
高層湿原 P	ミズゴケなどを主とした植物群落及び、泥炭地の発達が見られる場所に出る	<i>Eumotia naegeli</i>
陸生A Qa	耐乾性が強い	<i>Diadema contenta</i> f. <i>biceps</i> , <i>Littocella mutica</i> , <i>Pinnularia borealis</i> , <i>Hantzschia amphioxys</i>
淡水不安・不明種 U5	淡水域に出現するが、種まで同定できなかった分類群(水生/両生/不明)	<i>Aulacoseira alpigena</i>

に関しては好アルカリ性種の *Diadsmis contenta* *lbiceps* が8殻、有機汚濁に関しては好汚濁性種、pHに関しては好アルカリ性種の *Luticola muticaria* が9殻、有機汚濁に関しては広適応性種、pHに関しては好酸性種の *Pinnularia borealis* が1殻、有機汚濁に関しては広適応性種、pHに関しては中性種の *Hantzschia amphioxys* が8殻検出された。淡水不定・不明種 (U5) の珪藻は4分類群が検出された。 *Aulacoseira alpigena* は、有機汚濁に関しては広適応性種とされる。このほか、主に破片の産状で *Navicula* spp.、 *Nitzschia* spp.、 *Pinnularia* spp. が計41個検出された。

3-4. 大型植物遺体分析

堆積物試料は、バレオ・ラボにて、500ccを最小0.5mm目の篩を用いて水洗した。大型植物遺体の抽出および同定、計数は、実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。イネの初殻は、小穂軸が残存している個体を1個体とし、小穂軸以外の初殻はおおよその数を記号 (+) で示した。

同定した結果、草本植物のヒメクグ果実とカヤツリグサ属果実、ヒエ属炭化種子 (穎果)、イネ炭化初殻、エノコログサ属炭化有ふ果、イネ科炭化種子 (穎果)、オランダイチゴ属—ヘビイチゴ属果実、エノキグサ属種子、スベリヒユ属種子、ザクロソウ種子の、計10分類群が見いだされた。このほかに、科以上の詳細な同定ができなかった炭化種実を不明、残存状態が悪く、微細な破片であるため識別点を欠く同定不能な一群を同定不能炭化種実とした (表5)。

産出状況としては、イネとエノキグサ属が少量、ヒメクグとカヤツリグサ属、ヒエ属、エノコログサ属、イネ科、オランダイチゴ属—ヘビイチゴ属、スベリヒユ属、ザクロソウがわずかに得られた。

次に、得られた主要な分類群の記載を行い、図版4に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田 (2003-) に準拠し、APG IIIリストの順とした。

(1) ヒメクグ *Cyperus brevifolius* (Rottb.) Hassk. var. *leirolepis* (Franch. et Sav.) T.Koyama 果実 カヤツリグサ科

黄褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形。頂部に突起がある。表面に微細な網目状隆線がある。長さ1.2mm、幅0.8mm。

(2) カヤツリグサ属 *Cyperus* spp. 果実 カヤツリグサ科

暗赤褐色で、上面観は三稜形、側面観は狭倒卵形。頂部と基部が突出し、表面には斑点状の細かい隆起がある。長さ1.4mm、幅0.8mm。

(3) ヒエ属 *Echinochloa* sp. 炭化種子 (穎果) イネ科

完形ならば側面観は卵形、断面が片凸レンズ形で、厚みは薄く、やや扁平である。胚は幅が広く、長さは全長の2/3程度と長い。膾は幅が広いうちわ型。残存長1.3mm、残存幅1.1mm。

(4) イネ *Oryza sativa* L. 炭化初殻 イネ科

表11 SK2から出土した大型植物遺体 (括弧内は破片数)

分類群	水洗量 (cc)	500
ヒメクグ	果実	1
カヤツリグサ属	果実	5 (1)
ヒエ属	炭化種子	1
イネ	炭化初殻	11 (+)
エノコログサ属	炭化有ふ果	(2)
イネ科	炭化種子	1
オランダイチゴ属—ヘビイチゴ属	果実	(1)
エノキグサ属	種子	(11)
スベリヒユ属	種子	1 (1)
ザクロソウ	種子	2
不明	炭化種実	1
同定不能	炭化種実	(22)

+:1-9

完形ならば上面観は楕円形、側面観は長楕円形。2条の稜があり、表面には四角形の網目状隆線と隆線状の顆粒状突起が規則正しく並ぶ。残存長1.2mm、残存幅1.0mm。

(5) イネ科 *Poaceae* sp. 炭化種子 (穎果) イネ科

側面観は披針形、断面は狭卵形。下端に全長の1/3未満の長さの小さな胚がある。残存長1.0mm、幅0.4mm。

(6) エノキグサ属 *Acalypha* spp. 種子 トウダイグサ科

黒色で、完形ならば上面観は円形、側面観は倒卵形。表面には細かい網目状隆線があり、ざらつく。種皮は断面が柵状で、薄く硬い。残存長1.4mm、幅1.1mm。

(7) スベリヒユ属 *Portulaca* spp. 種子 スベリヒユ科

黒色で、上面観は扁平、側面観は円形。全体的にいは状の突起がある。「の」の字状になり、先端に着点がある。長さ0.7mm、幅0.8mm。

(8) ザクロソウ *Trigastrotheca stricta* (L.) Thulin 種子 ザクロソウ科

黒色で、上面観は扁平、側面観は腎形。表面全体に微細な突起がある。強い光沢がある。長さ0.6mm、幅0.6mm。

(9) 不明A Unknown A 炭化種実

上面観は楕円形、側面観は卵形か。表面は平滑で、強い光沢がある。長さ1.2mm、幅1.4mm。

4. 考察

珪藻の産出状況と環境指標種群から、SK2は滞水環境ではなく、ジメジメした陸域だったと考えられる。珪藻の殻は、乾燥した環境では化学的に溶解する現象が知られており (千葉, 2014)、ジメジメした環境であったSK2内が乾燥して、珪藻殻が溶解して破片となり、多産したと考えられる。比較的乾燥した場所であれば、花粉や種子などの植物化石は残りにくい。花粉分析や大型植物遺体分析では多くの化石は得られていないものの、イネ科花粉やアカザ科—ヒユ科花粉、オランダイチゴ属—ヘビイチゴ属果実やエノキグサ属種子、スベリヒユ属種子、ザクロソウ種子などが得られており、園池にはこれらの分類群の草本類が分布していたと考えられる。プラント・オパール分析の結果では、ネザサ節型やササ属型といったタケ亜科やシバ属、キビ族、ウシクサ族などが得られており、これらのイネ科植物もSK2の周辺に分布していた可能性がある。

また、プラント・オパール分析の結果ではイネ機動細胞珪酸体が多く産出しており、イネ穎破片を伴う。したがって、SK2の周辺には稲葉やイネの初殻が堆積していたと考えられる。イネの初殻については、大型植物遺体分析でイネ炭化初殻が得られているため、燃やされたと考えられる。その他の炭化した大型植物遺体では、ヒエ属炭化種子 (穎果) やエノコログサ属炭化有ふ果、イネ科炭化種子 (穎果) などが産出している。水田雑草を含む分類群が炭化している状況やイネ機動細胞珪酸体が多産する状況を考えると、稲葉やイネの初殻、それらに付随していたヒエ属やエノコログサ属が燃やされ、何らかの形でSK2の周辺に堆積していた可能性が考えられる。さらに、花粉分析ではソバ属花粉が得られた。遠方からソバ属花粉が飛来した可能性も考えられるが、ソバ属の花粉はソバの初殻に多く付着するため、ソバ属の初殻が堆積していた可能性もある。

一方で、今回の試料からはヒメクグ果実とカヤツリグサ属果実、サンショウモ属胞子といった湿った環

境に生育する植物の化石も得られた。珪藻分析の結果では、好汚濁性から好清水性、真酸性から好アルカリ性までの幅広い生息環境を好む珪藻種が得られているが、真酸性種と好酸性種が2種2般、好アルカリ性種が2種17般産出しており、好アルカリ性種が比較的多く得られている。好アルカリ性種が生息できる環境としては、地中を流下時にアルカリ性に変化した地下水（日本地下水学会，2022）が影響している可能性がある。すなわち、SK2はアルカリ性の地下水で一時的に保水されていたと考えられ、SK2が滞水したときや比較的湿潤状態のときに、ヒメクグヤカヤツリグサ属、サンショウモ属が生育していた可能性がある。

引用文献

- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理。42, 73-88。
 千葉 崇（2014）珪藻のタフノミーと珪藻化石群集による古沿岸環境復元を行う上での問題点。Diatom, 30, 86-103。
 千葉 崇・澤井裕紀（2014）環境指標種群の再検討と更新。Diatom, 30, 7-30。
 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究, 27, 1-20。
 日本地下水学会（2022）地下水のpHはどれくらいですか？。 <http://jagh.jp/jp/g/activities/torikichi/faq/72.html> (cited 20 December 2022)
 渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆晶子（2005）淡水珪藻生態図鑑。784p。内田老鶴圃。
 米倉浩司・梶田 忠（2003-）BG Plants 和名-学名インデックス (YList)。 <http://ylist.info>

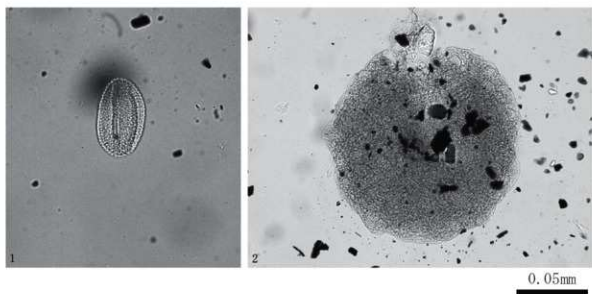


図27 SK2から産出した花粉・胞子化石

1. ソバ属 (PLC.3736)

2. サンショウモ属 (PLC.3737)

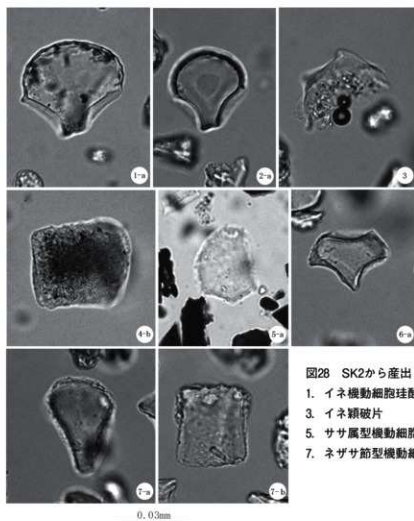


図28 SK2から産出した植物珪酸体

- | | |
|-----------------|---------------|
| 1. イネ機動細胞珪酸体 | 2. イネ機動細胞珪酸体 |
| 3. イネ穎破片 | 4. キビ族機動細胞珪酸体 |
| 5. ササ属型機動細胞珪酸体 | 6. シバ属機動細胞珪酸体 |
| 7. ネザサ節型機動細胞珪酸体 | a: 断面 b: 側面 |

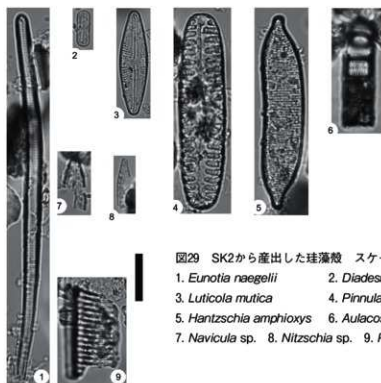


図29 SK2から産出した珪藻殻 スケールは0.01mm

- | | |
|--------------------------------|---------------------------------------|
| 1. <i>Eunotia naegellii</i> | 2. <i>Diademsis contenta f.biceps</i> |
| 3. <i>Luticola mutica</i> | 4. <i>Pinnularia borealis</i> |
| 5. <i>Hantzschia amphioxys</i> | 6. <i>Aulacoseira alpigena</i> |
| 7. <i>Navicula</i> sp. | 8. <i>Nitzschia</i> sp. |
| | 9. <i>Pinnularia</i> sp. |

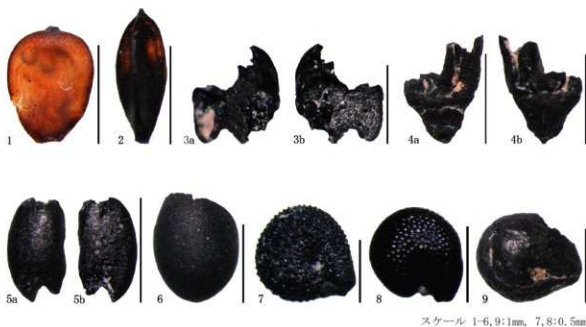


図30 SK2から出土した大型植物遺体

1. ヒメクグ果実、2. カヤツリグサ属果実、3. ヒエ属炭化種子（穎果）、4. イネ炭化初殻、5. イネ科炭化種子（穎果）、6. エノキグサ属種子、7. スベリヒユ属種子、8. ザクロソウ種子、9. 不明炭化種実

第6章 総括

1. 二之丸北西部

二之丸北西部では第1次～第2次調査で発掘調査した調査区1、6、7と第3次～第4次調査で発掘調査した調査区12で近世遺構を確認することが出来なかった。

一方、調査区11の標高約13mで近世遺構面（15層）を確認することができた。15層は既往の調査で築城期の盛土とされる地山由来のブロックが混ざった褐色土である。2008年度試掘調査A1調査区8層、A2調査区13層、A3調査区19層、A5調査区J層で地山（暗橙色又は黄褐色）ブロック混じりの層を検出している。そのうちA3調査区19層は築城期盛土と評価されているが、検出した標高は約13.5mで調査区11の15層と合致しない。この検出標高の差は15層が直上の現代層によるかく乱を強く受けているためと考えられる。

『金城温古録』等から調査区11周辺は家臣屋敷、御殿と変遷していることが確認でき、御殿は何度か建て替えが行われている。しかしこれら土地利用の変遷を土の堆積状況から確認することはできなかった。15層から大窯4段階末（17世紀初）の皿が出土したように築城期盛土の直上が現代層となるため、近世中に行われた盛土は削られたと考えられる。

近世遺構はSK1とSK2の2基である。SK2の埋土はチャート亜鉛礫を多く含むグライ化した砂質土である。埋土は自然科学分析によって一時的に滞水していた時期はあったものの、じめじめとした陸域であったことが明らかになった。日当たりや排水が悪く湿潤な環境にある土坑や一時的に水を入れた圍池を想像することができる。調査地点が家臣屋敷のような生活空間や藩主の日常的な居所である御殿跡であることから排水が悪い湿潤な環境であるとは考えにくい。

今回の発掘調査及び科学分析の結果から家臣屋敷もしくは御殿の屋敷主や藩主が在城していた時などに一時的に水を入れるような圍池の可能性が高い。

SK1はSK2と同じ15層から掘りこまれているが、SK2との共通性はなく今回の調査から関連する遺構とは考えにくい。SK1も遺物から形成時期を明らかにすることはできなかった。

調査区11で確認したコンクリート基礎Aは「名古屋城二之丸平面図 歩兵第六連隊」に描かれた「兵舎及講堂」の基礎と考えている。コンクリート基礎BはAに比べて貧弱なつくりで重量物を支えることができないと想定し、Aの補助的な役割を持つ遺構と考えている。また、コンクリート基礎等の厚重な遺構はかく乱されていなかったことからコンクリート基礎周辺ではかく乱が及ばないことがわかった。すなわち近代遺構周辺で近世遺構が残存していることがわかった。

過去に行われた二之丸庭園及び二之丸地区発掘調査の結果、二之丸にある近代の建造物のほとんどが南北軸を座標北から約5度西に振っていることが明らかになっている。2008年度A1調査区、A3調査区、A4調査区で出土したコンクリート盤も南北軸を座標北から約5度西に振っている。コンクリート盤は兵舎が存在していた期間（1874～1964）に設置されたものである可能性が高い。

二之丸北西部は全体的に遺構の残存状況が悪いと言えるが、条件が良ければ近世遺構を確認することができる。今後はこれらを検出した調査区11周辺での発掘調査が必要である。

2. 二之丸南部

二之丸南部では第1次～第2次調査で発掘調査した調査区2、3、5、10で近世遺構を検出している。調査区5、10では馬場に関する遺構の検出を目的に調査区を設定したが、馬場に係わる遺構を検出することはできなかった。今回設定した調査区15では過去の調査区5、10と同様に馬場に関する遺構の検出を目的に調査区を設定したが、馬場に関する遺構を検出することはできなかった。調査区5、10、15では標高約130mに石灰や石炭片、瓦片を混ぜた黒色の近代硬化面を検出した。溝、石列、土坑といった近世遺構はその直下で検出している。馬場の土居等の高さのある遺構は黒色硬化面に破壊されたため確認できず、溝等の地中に埋設されている遺構は破壊を免れたと考えられる。

調査区15で検出した近世遺構はいずれも馬場との関連は不明である。出土遺構が絵図で描かれることが少ない石列（SS8）や溝（SD7）であることから絵図から推測することも困難である。しかしSD7は埋土に近代遺物が含まれることから機能を保持していたかはわからないが、近代まで存在していたと考えられる。このことから馬場構築以前に存在した屋敷地に関する遺構とは考えにくい。馬場の廃絶は徳川家が退去し、政府の所管となった1873年（明治6）頃である。同年に兵舎に建設が始まったため、近代遺構とも考えにくい。このことからSD7は馬場に関する遺構である可能性が高い。

馬場の全体を把握するためには調査面積が不足しており、特に馬場の中心である現在の愛知県体育館周辺での調査が不足している。愛知県体育館移転後には本格的な調査が必要である。



1



2



3



4



5



6



7



11



12



17



25



26



40



24



33



18



19



39



38



29



41

報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせきなごやじょうあとみこくじちく(にのまる)はっくつちょうさほうこくしょ							
書名	特別史跡名古屋城跡未告示地区(二之丸)発掘調査報告書							
副書名	第3次・第4次							
シリーズ名	名古屋城調査研究報告4 埋蔵文化財調査報告3							
編著者名	高橋圭也・森持志(パレオ・ラボ)・石川智(パレオ・ラボ)・バンダリスダグシヤン(パレオ・ラボ)							
発行機関	名古屋市観光文化交流局 名古屋城総合事務所 名古屋城調査研究センター							
所在地	〒460-0031 愛知県名古屋市中区本丸1番1号 TEL. 052-231-2481							
資料の保管機関	名古屋市観光文化交流局 名古屋城総合事務所							
発行年月日	2023(令和5年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まぐわしせき 特別史跡 名古屋城跡	あいちけん 愛知県 なごやしなか 名古屋市中区 ほんまるばん 本丸1番ほか	23100	市遺跡番号 7-1 県遺跡番号 007001	35° 11' 2"	136° 54' 1"	2016/06/28 ~ 2018/12/28	56㎡	整備計画 策定
遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
名古屋城跡	城跡	近世・近代		石組溝 石列 土坑		近世陶磁器・ 近代陶磁器・ 瓦ほか		—
要約	<p>2019年から継続して行った発掘調査によって二之丸北西部は遺構の残存状況が悪いこと、南部は北西部と比較して良好に残存していることが明らかになった。</p> <p>北西部で近世の土坑と近代の建物基礎を確認した。近世の土坑は御殿や御殿に先行する屋敷地に伴うものと考えられる。近代の建物基礎は絵図等の分析から陸軍兵舎であることが分かった。</p> <p>南部で石組溝や石列を確認した。「御城二之丸図」に描かれた馬場の給排水施設と考えられる。</p>							

名古屋城調査研究報告4
埋蔵文化財調査報告書3

**特別史跡名古屋城跡未告示地区(二之丸)
発掘調査報告書 第3次・第4次**

令和5年3月31日

編集・発行 名古屋市観光文化交流局
名古屋城総合事務所
名古屋城調査研究センター

印刷 西濃印刷株式会社